茅ヶ崎の昔話

9 栄光の浜降祭

昭和55年8月15日から三日間東京・渋谷区の神宮外苑・絵画館広場で「第十回日本の祭り」が行なわれた。主催は日本の祭り実行委員会。後援は自治省・文化庁など。青森ねぶた祭り・秋田の竿灯とともに、茅ヶ崎海岸浜降祭は郷土の栄誉をかけて熱演した。

司会の坂本九ちゃんが「浜降祭の神輿は〝ドッコイ、ドッコイ〟という独特のかけ声です。会場の皆様もご一緒に掛け声をかけて下さい」とアナウンスすると、会場は割れんばかりの大声援となった。

菅谷・第六天・十間坂神明宮・諏訪・倉見と五つの神社の神輿は、広い会場の晴れ舞台に、すっかり興奮していた。

この日の模様はフジテレビで全国放映された。

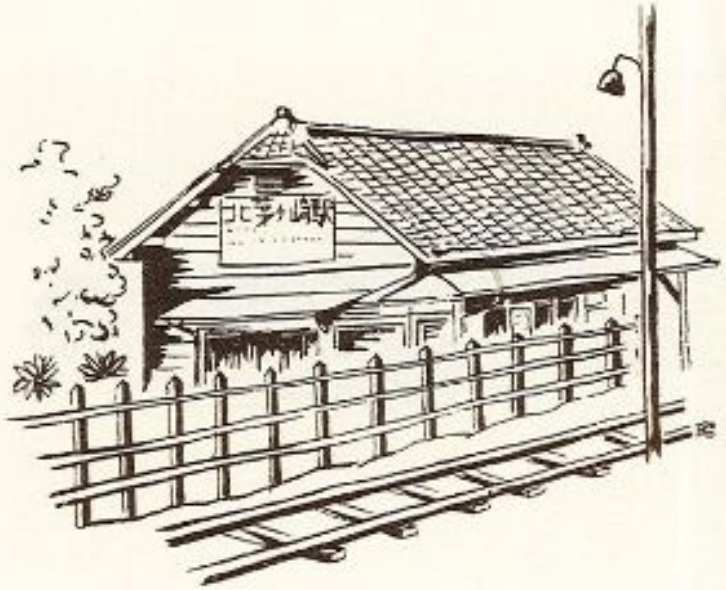
1 相模線

「ちがさきー。ちがさきー。相模線乗り換えー。」

国鉄茅ヶ崎駅のホームに立つと、歯切れのよい、アナウンスが聞こえてきます。この相模線は、湘南の景勝地、茅ヶ崎が起点で、橋本まで結ばれています。

大正十年、私鉄の相模鉄道が、茅ヶ崎から寒川までの湘南平野に、砂利運搬線を走らせました。その後、相模鉄道は砂利運搬から、客車も走らせるようになりました。

茅ヶ崎駅――日東駅（現在北茅ヶ崎駅）――円蔵駅（戦後廃止）――香川台駅（戦後廃止）



——香川駅——寒川駅でした。

昭和十六年、太平洋戦争がはじまると、相模鉄道は、軍需品や、一通の召集令状のもとに、戦場に征く兵士たちを、特に甲府方面に運ぶ、重要な働きをしていました。

昭和十九年六月、戦争はますます激しくなり、相模鉄道は、〝戦時買収鉄道〟として、国鉄に買収され相模線になりました。

戦後は、八王子方面の海水浴臨時列車などが、特別に走っていました。

駅のホームには、茅ヶ崎駅長と、茅ヶ崎美人のおねえさんが、ホームに到着する臨時列車に花束を贈り歓迎するなど、山の子供達を喜こばせ、夏の風物詩となっていましたが、車社会のこの頃では、廃止されています。

かつては、砂利を運んでいた相模線は、現在ではひと昔前とは性質を異にしています。首都圏の鉄道として、新しい使命を帯びています。

沿線には、鶴が台団地があります。

「空気のきれいなところへ」と願うサラリーマンのマイホームの夢は、相模線の走る郊外へと広がって、朝夕のラッシュ時には、通勤、通学などの乗客は増える一方です。

また茅ヶ崎を走る相模線は、別名高校生デイーゼルカーとも言われています。

茅ヶ崎駅からは、県立茅ヶ崎高校生が、茅ヶ崎の怒濤を図案化したバッチを光らせ、電車を降りてきます。

北茅ヶ崎駅は、開校したばかりの県立鶴嶺

高校生の清潔そうな制服が長い列をつくっています。

香川駅は、住宅地のどまん中にあります。そこには、県立北陵高校があり、校章は湘南高校に似ているが、これは湘南に追いつけ、追い越せが目標なのだそうです。次の停車駅は、寒川である。昭和五十四年からは、県立寒川高校生の明るいはずんだ声が、駅のホームに響くはずである。県立寒川高校は、町民の願いなのだ。

茅ヶ崎のローカル線相模線は、今日も若者たちをのせて、住宅街をゆっくり走っています。

北茅ヶ崎

鶴が台

香川

2 茅ヶ崎のあけぼの

今から四千年ほど昔、人々は赤羽根から、小出にかけて住んでいた。もちろん、はじめのうちは、一つの場所に住みつく事が出来ず、木の実や、けものを追い、貝を拾ってあちこち歩いて、木の陰に眠ったりしていた。が、そのうちに、いろいろと道具を作る事を覚えると、今までより沢山のえものをとる事ができるようになった。そうすると、ひとつの場所に住んだ方が便利だ。

当時の茅ヶ崎は、今の海岸線よりも六キロメートルも、北方まで海が入っていた。

狩猟、漁猟、飲料水に最適な南の海よりの丘の上を、選んで、たて穴住居をつくった。

たて穴住居は、地面を五十センチぐらい掘る。た

て物は五・六メートルぐらいだ。雨が降っても水が流れこまないよう、床のまわりに、水はけの溝も掘った。

当時の人々の遺跡、遺物が堤貝塚、西方貝塚、丸山貝塚に残されている。

狩猟、漁猟、木の実をとる時代を、土器の形により、縄文時代と呼んでいる。

弥生時代（弥生という名前は、この時代が研究されるきっかけとなった土器が、東京大学に近い、東京の弥生町で発見されたからだ。弥生式の土器は、縄文式のごてごてしていた土器とくらべると、形も模様も、ずっとあっさりしており、焼きもかたくなっている）には、茅ヶ崎の地形も変化し、さらに陸地が南へのびた。そこへ水田をつくった。高田、室田、小和田などである。甘沼や菱沼は、沼地であった。

海にかこまれた懐島（円蔵、浜之郷、矢畑、西久保）、中島、柳島は島であった。

遠い昔の人々は、苦しいけれど、水稲耕作が行なわれ、希望にみちた新しい生活がはじまった。

茅ヶ崎の名前のいわれは、あたり一面が沼地で、茅（かや）やあしが茂り、陸の一部が海につきでていた。茅（かや）のある岬（みさき）から名づけられた。

お神楽の鯛さん

鯛（てい）さんの神話劇、やまたのオロチは、老若男女に絶大な人気を博した。

『天上界（てんじょうかい＝たかまが原）に住んでいる神の中でも、優れた力を持つアマテラスオオミカミの弟、スサノオノミコトは、たかまが原に住んでいたが、暴れ者なので、たかまが原を追われ地上へ降ろされる。と、おじいさんとおばあさんが、美しい娘を真ん中に、しくしく泣いていた。訳を尋ねると、「やまたのオロチ（大蛇）が毎年やって来て、娘を一人ずつ食べて行く、今度はとうとうわしの娘が食べられる」と言う。スサノオノミコトは、「わしがオロチを退治しましょう。そのかわり、あなたの娘を妻にほしい」

オロチは頭が八つ、尾が八つの怪物だ。スサノオノミコトは少しも恐れず、切り倒した。その時オロチの体から、立派な刀が出てきたので、アマテラスオオミカミに献上し、約束どおり娘と幸せな結婚をした。』

「古事記」「日本書記」の神話をテーマとする神代神楽の発祥は、江戸初期である。鯛さんは慶応二年円蔵村に生まれる。神楽に魅せられ少年時代に修業、明治から大正にかけて、お神楽の鯛さんと名声をあげる。

当時、飛ぶ鳥も落とす名門九代目市川団十郎に稽古をつけてもらった事で、破格な市川円十郎という名を、団十郎からもらう。その時の教えをヒントに歌舞伎に似た仮面劇を考案した。無言劇（パントマイム）からセリフが入る、歌舞伎風に演出された〝勧進帳〟は今でも古老の語り草だ。鯛さんは、三十五座を演ずる大一座を組み、〝神楽教会所社長〟の肩書を持つ。神代神楽、新派、面芝居とあまたの新作を演じ、大衆の人気を呼んだが、昭和三十一年、満九十歳で亡くなった。

――稲が実り、スズメが立つ、鎮守の森は秋祭りだ。

祭り囃子に誘われて、鯛さんの元気な姿が見えるようだ。

4 懐島権頭景義（ふところじまごんのかみかげよし）

平家にあらざれば人にあらず、平家一門の勢いがさかんになってくると、当然これに対抗する勢力も強くなります。

平家が都で花にうかれてだんだん貴族化していた頃、源氏の若者達は、西の空をにらんで源氏再興の機会を待ちつづけていました。

治承四年（じしょう＝一一八〇年）九月はじめ、平家一門は大庭景親（おおばかげちか）からの早馬（手紙）によって、頼朝の挙兵を知りました。

同九月末、平氏は清盛（きよもり）の息子、平維盛（これもり）を総大将にして京都を発し、東国に向かいました。

これを迎え討つ頼朝の軍勢とが、富士川をはさんで戦いました。

都で花にうかれ、歌や、ぜいたくな貴族の生活にすっかりなれた平家の劣勢は、はっきりあらわれ、たくましい源氏の敵ではありませんでした。

同年十月、平家は敗れ京都へ逃げ帰りました。

大勝した源頼朝は、同年十月二十三日、相模国府ではじめて、勲功の賞として、懐島景義に本領を安堵しました。その上、河村義秀の所領、河村郷も景義に与えました。

これにひきかえ平家方の大庭景親は降参して、身柄は上総（かずさ）広常に預けられました。大庭景親とともに平家方に組した河村義秀は懐島景義に、預けられました。

懐島景義の恩情

円蔵村の西の方に、七千坪の懐島景義の館（やかた）がありました。（村の人は、これを懐島城＝ふところじまじょう＝と呼んでいました。）横堀でかこまれた近くには、乗馬の練習をするところや、商家などがあり、多くの人が住んでいました。

治承四年十月二十六日、大庭景親は、固瀬河（今の片瀬）のあたりで首を切られ、さらし首にされました。固瀬川のあたりは、のちに和田合戦の時も、むほんをするやから二百三十四人の首をさらしており、鎌倉時代には処刑場となっていました。

源平盛衰記によれば、大庭景親は兄懐島景義に斬られたことになっています。そしてこのとき景親の子、太郎も殺されました。

大庭景親の弟、俣野景久は頼朝に降参しないで、平家をたよってひそかに上洛しました。

曽我物語によれば、景義の功労は、源頼朝の御代におよび、景義は、鶴ヶ岡八幡宮若宮の俗懐島景義は、村のためによく働き、人々を助けたりして、頼朝から、ごほうびをもらいました。

景義は鎌倉鶴ヶ岡八幡宮を初めて設計したりしたので、頼朝が京都へのぼる時は、円蔵の館に泊まって行くようになりました。

別当となり、神の人の総官を賜わったのです。その上、大庭みくりやは先祖の本領地であるが、この度あらためて、これをうけました。

そのほか庄園、田畑数ヶ所賜るなど、頼朝は、景義の御恩に随分のきりもりをしたものでした。

安房（あわ）から、上総（かずさ）・下総（しもうさ）へと入った頼朝の軍が相模国（さがみのくに）へと着いた治承四年（一一八〇年）十月六日。その日は民家に宿泊した頼朝は、翌七日鎌倉の鶴ヶ岡八幡宮に参詣し、父源義朝の住んだ亀谷の旧跡に居館を建てようとしました。が土地が広くないので、岡崎義実がここに寺を建てるようすすめて、これをやめました。のちここに建った寺を寿福寺という。

景義は、鎌倉権五郎（かまくらごんごろう）景正（かげまさ）の孫、大庭景忠（おおばかげただ）の子として生まれ、弟に景親（かげちか）を持っていました。

治承（じしょう）四年、源頼朝の旗上げのおりには、兄弟敵と味方に

翌々日の十月九日頼朝は、懐島景義に居館の造営を命じました。十一日には、伊豆から妻の政子が昨晩泊った稲瀬河のあたりから、鎌倉に入りました。懐島景義は、この政子を迎えました。

この日、伊豆山権現社の僧侶、良暹も鎌倉に着きました。良暹は、前々からの頼朝の祈禱師であり、箱根権現の別当、行実の弟でありました。

その翌十二日、頼朝は由井が浜にあった鶴ヶ岡八幡宮を、小林郷の北山に（現在のところ）移すことを決め、伊豆山権現社の良暹を、別当職に補任しました。そして鶴ヶ岡八幡宮の奉行を懐島景義に命じました。

これより以前、兼道の旧宅の移転を懐島景義

わかれ、親わなければならない、運命にありました。

ちょうどそのころ、河村義秀という男が、頼朝にそむき、罪として円蔵の館で首を切られることになりました。

ところが景義は、

に命じていたが、十五日にでき上がり、ついで十二月十一日には新しい御所が、懐島景義の手によって竣工し、この日移りました。

新造の御所は、今の横浜国大の付属小学校のところの大倉郷に建てられました。

源頼朝

「この人物は見所がある」として首を切らずに十年間も、かくまいいろいろな勉強やヤブサメを練習をさせました。

義秀は

「自分は悪いことをしたのに……」

景義があたたかく、面倒を見てくれると感激して、立派な男に生まれかわりました。

そして鶴ヶ岡八幡宮のヤブサメの時、頼朝の前で見事な武芸を見せ、命をすくわれました。

その時の義秀の目には涙が光り、心から景義の恩情に深く感謝しました

これが大倉幕府といわれたところです。

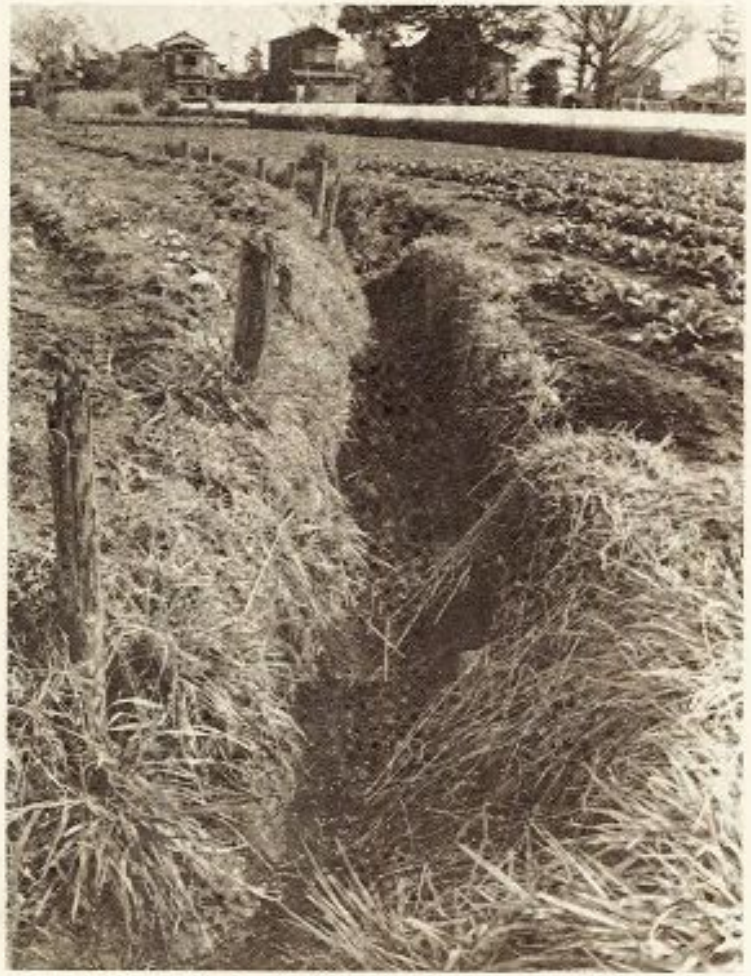
頼朝に命ぜられた鶴ヶ岡八幡宮の移転は、養和元年（一一八一年）五月、材木奉行を景義がつとめ、七月に入って浅草の大工が来て、造営がはじまりました。

このとき、ご神体を仮殿に移す遷宮の儀に、

「相模国（さがみのくに）懐島（ふところじま）の痔（まうけ）の一古娘（いちこ）」が招かれました。

痔（まうけ）は神館（かんだち）であるが、懐島内の伊勢神宮の分社の巫子（みこ）が、景義が奉行であった関係から、招かれたものであります。

同月二十日に若宮宝殿の上棟式



懐島城のあと。
城内に敵が入らないように、周囲に空濠が作られていた。
今では小さな溝となってのこるだけである
後方は、伊勢神宮の分社、円蔵神明大神。

が行われ、翌八月十五日に正殿の遷宮。翌寿永元年四月、景義は、社前（鶴ヶ岡八幡宮）の水田三町ばかりの耕作をやめさせて、鎌倉に立派な池をつくりました。

寿永元年（一一八二年）九月懐島景義は、鶴ヶ岡八幡宮の西に「宮寺の別当坊」を建てました。

曽我物語で、「懐島景義が鶴ヶ岡八幡宮若宮の俗別当になされて、神の人の総官を賜ったとしたのは、鶴ヶ岡八幡宮の造営を景義が一切命ぜられていることを指したものであります。」

その後寿永元年七月、頼朝の子頼家の誕生に際しては、鳴弦（めいげん）の役をつとめ、元歴元年（一一八四年）、公文所（くもんじょ）ができたときは、景義は酒宴を催し、翌文治元年（一一八五年）、源頼朝は、病に重い伊豆の後家人加藤景廉をなぐさめるため、馬を贈ったが、この馬は、以前景義が頼朝に献上したものであります。

建久元年（一一九〇年）十月、頼朝が上洛するとき、はじめて景義の懐島の館に宿泊しました。その前年の文治五年（一一八九年）七月の奥州征伐には、留守居をつとめました。やがて景義は、建久四年八月、年令の老衰により、岡崎義実とともに出家をとげま

した。

懐島景義が幕府の宿老として、いかに重用にされたかは、〝吾妻鏡〟に記されています。

すなわち文治五年、奥州の藤原泰衡（やすひら）が源義経をかくまったとして、頼朝はその追討の宣旨を朝廷に申請していたが、その許可がなかなかおりません。

やがて泰衡が義経を自害させ、その首を鎌倉に送ったこともあって、朝廷は奥州征伐の宣旨をなおのこと頼朝に下すのをしぶったのです。そうこうしているうち、鎌倉には各国の御家人が集まり、宣旨がなくても出陣すべきだという声が大きくなりました。

そこで頼朝は〝武家古老〟として、兵法の〝故実〟を知る懐島景義をまねいて、

「どうしたらよいものか」

とたずねました。懐島景義はこれに対して、思案におよばずに答えました。

「軍中については、将軍の命令を聞き、天子の詔よりも優先する。早く発向すべきである。」

これを聞いた頼朝は、非常に喜こんで、奥州発向に踏みきりました。この褒美として、馬に鞍（くら）をつけて、景義に与えました。この時、馬を曳いて来たのは、下野の御

家人、結城朝光でありました。朝光は、馬の手綱（たずな）のはしを取って、縁側にいた景義のところに投げ渡しました。

懐島景義は、これをすわりながら、手にとって受けとりました。

頼朝が退座したあとに、景義は、朝光を呼んで、

「自分はおいぼれのうえ、保元合戦のときの疵（じ）のために、歩くのが思うようにまかせず、馬を拝領しても庭におりていけない。手綱（たずな）を投げてくれた心づかい誠にありがたい」

と感謝しました。

保元の乱で、懐島景義は負傷しました。

吾妻鏡は、このことを懐島景義が幕府の重臣たちの前で語っているのをのせています。

時は建久三年（一一九二年）八月一日、この日は一日雨が降り続いていました。

新しくできた御所に移った頼朝は、ここで幕府の重臣をまねいて酒宴を催しました。

この酒宴を担当したのは、懐島景義でありました。

やがて酒がすすむうちに、頼朝から各人に過去のことを話せということになり、懐島景義は保元合戦のことを話しました。

「勇士の用意すべきものは武具である。

とくに弓矢については、気を配る必要がある。

鎮西（ちんぜい）八郎為朝（はちろうためとも）は、弓矢の達人である。

しかし、身丈（みたけ）にくらべて弓が長すぎているようだ。

自分は東国育ち、馬のあつかいは、一枚上手だ。

馬に馴れない為朝（ためとも）は、騎馬のとき弓が思うにまかせないであろう、とひそかに思った。

自分が為朝の右手に廻ったとき、為朝の射程が狂って、弓の下を越え、身に

あたるべき矢が、膝にあたってしまった。
命を失うところであった。
勇士は、もっぱら騎馬に上達しなければならない。」
と。
為朝の弓を受けて、生きながらえているのは、景義一人であります。
このことは、鎌倉でも名誉の負傷として語りつがれた事であります。

源頼朝は、えらい政治家でありました。しかし部下の取締りに気を配るあまり、自分の手足にひとしい一族の弟たちを、犠牲にしました。
奥州で義経とともに死んだ弁慶の奮戦は、有名です。
富士の巻き狩りから帰ると、ちょっとした理由で、伊豆の修善寺におしこめられて殺された範頼（のりより）、こんな事ですから、一族はへる一方でした。
頼朝の子、頼家（よりいえ）、実朝（さねとも）と源氏の将軍は、わずか三代で絶えてしまいました。
頼朝が死ぬと長男の頼家が源氏二代目の将軍になりました。けれども将軍とは名ばかり

で、実際の政治を動かしたのは、頼朝の妻、政子とその父、北条時政（ときまさ）でありました。
そのためか、勝手なふるまいが多い事で北条氏は頼家を、修善寺におしこめ殺してしまいました。
つぎに源氏三代目の将軍をついだ実朝（さねとも）も十二歳で将軍職についたが、源氏にとって悲しむべき時代でありました。
実朝十四歳の一二〇五年、源氏の重臣、畠山重忠（はたけやましげただ）が、北条氏にほろぼされました。
実朝が『金槐和歌集』（きんかいわかしゅう）を編んで、藤原定家（ていか）におくった一二一三年、侍所の別当和田義盛（よしもり）一族が北条氏にほろぼされました。
懐島景義は、この和田義盛の乱に、反乱軍に加わり討死をとげたのでありました。

懐島景義の墓

懐島の雄、景義の墓は、円蔵の館（やかた）横堀（よこぼり）近くに建てられていましたが、時の経過とともに土中に埋まってしまいました。

それから七百年後の大正時代、円蔵二一一五番地の高橋庄平さんのおじいさんは、ある日景義の夢を見ました。

目の病にかかっていたおじいさんは、夢の中で、

「景義の供養をすると目がなおる」

というお告げを受けました翌日、畑を掘ったところ、五輪の塔が出てきましたので、これを（写真）建てました。お告げのとおり、目の病はなおりました。

5 鶴嶺八幡社

今から九百五十年も昔、長元三年（一〇三〇年）三月九日、源頼義が、千葉県におきた叛乱（はんらん）をしずめるために、懐島を通りました。その時に建てたのが、鶴嶺八幡社なのです。

それから二十年ほどたって、また安倍一族（あべいちぞく）の叛乱がありました。（前九年の役）

源頼義の子供に、八幡太郎義家がいました。おとうさんの応援で、同じコースの懐島を通り、鶴嶺八幡社によって祈源

をしました。その時に、イチョウの苗木を植えました。その時のイチョウが、理在神奈川県の文化財として有名な、「鶴嶺八幡の大イチョウ」です。

神奈川県で一番古くて、大きいイチョウです。

鎌倉時代には、神社がさかえた時代です。大きな仏殿や五重塔があったといわれていますが、これらは火事で焼けてしまいました。

一一九八年（建久九年）に、稲毛三郎重成（いなげさぶろうしげなり）という人が、

相模川（今の町屋）に橋をつくりました。

この時、源頼朝が「渡りぞめ」に来ましたが、平家の亡霊があらわれ、馬がおどろいてあばれだしたので、頼朝は馬から落ちてしまいました。

この時に十人の警護の武士が責任をとって、腹を切って死にました。

このように伝えられている武士たちのお墓（五輪塔）が十基、神社の近くの寺（懐島山龍前院）にあります。

源頼朝も鶴嶺八幡宮を大切にしましたので、頼朝とのつながりのふかいお宮です。
参道に太鼓橋があります。
いつごろできたものかはっきりしていませんが、めずらしい形（そりが強い）なので有名です。
参道と松並木（約八百米、〝八丁松並木〟ともいわれる）は、茅ヶ崎市の文化財にもなっています。
これは江戸時代のはじめに、朝恵（ちょうけい）という人が植えたもので、三百年以上もたった大きな松の木が四季を通して美しい緑をながめさせてくれます。
神社の前の通りは境内地です。ここは横大門といわれて、やぶさめの行事がおこなわれた

ところです。
一六四九年（慶安二年）八月に三代将軍、家光は、社領として朱印（しゅいん）七石を寄進しました。
一六七五年（延宝三年）に宮鐘ができました。現在の鐘は、それから三つ目の鐘です。
明治六年に「村社」昭和九年「郷社」という立派な格式がつけられました。
鶴嶺八幡宮の事は、古いものでは「東国紀行」「海道記」「相模風土記」「浜之郷風土記」に、また「石の額」「石どうろう」「石の祠」「道祖神」「手洗いの石」「棟札」などに、昔の年号や、いわれがきざまれています。

6 国宝阿弥陀三尊仏

国宝

鎌倉時代、懐島郷西谷村の宝生寺に造られた阿弥陀三尊は、昭和三十四年六月二十七日、国指定の重要文化財に指定されました。この仏像は善光寺本尊の模像である。東国地方においては、その信仰から、模像を造って、拝礼したのである。

7 八幡さま

茅ヶ崎には、八幡さまのお宮がいくつかあります。

鶴嶺八幡社・柳島八幡宮・平太夫新田八幡宮・甘沼八幡宮などが有名で、昔はあつくうやまわれていた神さまです。

八幡の神は、弓矢の神で、勝負運が強いことで、源家の氏神になっていました。

茅ヶ崎の村々は、八幡信仰がほとんどすみずみまで、広まっていました。

八幡の神は、「八幡大菩薩」（はちまんだいぼさつは、アミダ如来）とよばれ、この神さまに祈る時は、「南無八幡」といいました。

菩薩とは、仏をふかくうやまい、人間を救う者をさします。

古い時代の八幡の神は、仏教の考えによって、仏が神さまの形をとって、現われたものです。

これを権現（ごんげん）ともいいます。

その頃の名残りとして、茅ヶ崎には権現さまが、いくつか残っています。

円蔵バス停近くには、懐島権現があり、これは鶴嶺八幡社の系統で、懐島景義が、源家の守り神として大切にしていたものです。

相模線北茅ヶ崎駅前には、三島権現があり、今でもお参りする人が、あとをたちません。

高田熊野神社は、その昔熊野権現と言われ、

由緒ある神社として知られています。

また茅ヶ崎海岸の浜降祭は、寒川神社の伝説が有名になっていますが、歴史上では、鶴嶺八幡社の方が、古くから行なってきたものです。

数多くの神輿のほとんどが、鶴嶺八幡社の神輿から分かれ、独立したものなのです。

みなさんも、八幡さまに願をかけてみてはいかがでしょうか。

8 弁慶塚

建久三年（一一九二年）、源頼朝が相模川の渡りぞめの時、源義経、弁経の亡

霊が出て、世人をおどろかせました。
村の人たちは、おそれおののき、供養のために鳥井戸村には、義経をまつる御霊神社を、浜之郷村には、弁慶を供養するために塚をたてました。

9 鶴嶺八幡社女護が石

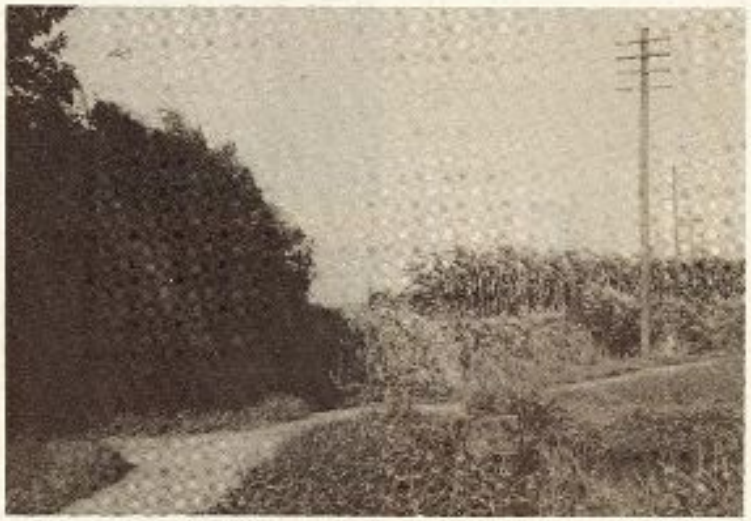
昔から、女性の守護神として信仰の対象になった石。（女護が石＝めごがいし）
「一念は岩をもとおす」
たとえのように、この石を手でさすりながら、願いごとを念じました。
病気になれば、病める部分を、傷つけば傷の部分を、心に悩みあれば、むねを…石とからだを、こうごに何

十べん、何百回と手をあててていのりつづけました。
そのくぼみもあざやかに、今にひきつがれています。

10 片葉のアシ

鳥井戸橋の近くには、片葉のアシといって、アシの葉が一方に片寄っているのです。これは、海から来る風のためなのでしょうが、旅人にたいへん、めずらしがられていました。

鶴岡八幡社大鳥居から町屋方面を望む



鎌倉街道と矢畑蔵屋敷（矢畑689番地）あと

11 なん時橋

一里塚（いちりづか）、南湖の松原（なんごのまつばら）、左富士（ひだりふじ）の名所を過ぎると、今宿と中島の境に今宿橋（現在はありません）という小さな土橋がありました。

この今宿橋がこれからお話する〝何時橋〟（なんどきばし）であります。

橋の近くには、特別大きな木が繁っていました。

橋の周囲には、ヨシやアシがうっそうとして、夜をむかえると、あたりは物音ひとつしません。

シーンと静まりかえってぶきみです。

あれから、もうどのくらいの時がたったでしょうか。

今、まさにこの土橋を渡ろうとしている若衆がいました。その時、この若衆の足元になまぬるい風が吹きつけてきました。

よく見れば、白衣の美女が髪をみだして、橋のかたわらに立っているのでありました。

若衆は一瞬ギクリとし、体から血が抜ける思いでありました。

女は、この世で見たこともない美女でありました。

だが、よく見ると、顔は青白く光って見えます。

男は、そのきわめて短い時間、吸いこまれるような気持にさせられました。

美女は、この若衆の気持を見ぬくように、肝っ玉が

ふるえている若衆を、あざ笑いながら近ずいてくるのでありました。美女は、

「今、なんどきだ――。」

と美しい声で聞くのでした。

若衆はふるえる体に力を入れて、時を知らせようとしましたが、声がでません。

女は、しつこく〝今、なん時だ〟とくりかえし迫ってくるのです。

その時、最早若衆は、我を忘れ気を失なって倒れてしまったのでありました。

この美女は、あたりが暗くなると、風雨でも、特に若衆をねらって姿を現わしました。

里人の語るところによれば、

「今、何時だ――。」

と言われた時、

「すぐに、その時を答えると、微笑をもらして消え去る」と言うのでした。

午前			
0時	九ツ	真夜	子
1時	九ツ半		
2時	八ツ	夜	丑
3時	八ツ半		
4時	七ツ	晩	寅
5時	七ツ半		
6時	六ツ	明	卯
7時	六ツ半		
8時	五ツ	朝	辰
9時	五ツ半		

ところが、時を知らせない若衆は、女の胸にだかれ、川の中へ吸い込まれてしまうのでありました。

さらに里人は、

「昔、今宿の里の一美人が、意中の人と結婚の約束をした。

それも夫婦の交わりをして、固く契りあった仲でありながら、ある夜半、男はこの今宿橋の橋上で会う約束をうらぎったのでした。

それとは知らず、今宿の里の美女は、あたりが明るくなり、鶏の鳴く時刻まで、幾日も、幾日も待ったと言うのです。

それほど茅ヶ崎の女は、純情でしたのに、何と言う男でありましょうか。

こうして今宿の里の美女はつかれきって、気が

午後			
10時	四ツ	昼	巳
11時	四ツ半		
0時	九ツ	真昼	午
1時	九ツ半		
2時	八ツ	昼	未
3時	八ツ半		
4時	七ツ	夕	申
5時	七ツ半		
6時	六ツ	暮	酉
7時	六ツ半		
8時	五ツ	宵	戌
9時	五ツ半		
10時	四ツ	夜	亥
11時	四ツ半		

くるい今宿橋に身を投げたのでした。
この橋上に現われる美女は、その亡霊じゃ。」
と言うのでした。
この亡霊は、江戸の末期まで続き〝今何時だ〟と言うに〝今、一番ドリが鳴くころだ〟と答えると夜明けが近いので、スーッと消えてしまうのでありました。
もうその頃は、この亡霊は人に害を与えるようなことはしません。それですから、東海道今宿橋は、何時橋として有名になりました。
この話が、旅人から旅人へ、江戸まで伝わり、橋のそばには、夜店や、なんどきそば屋まで立ちならび、亡霊を見に来る人々で、にぎわったということです。
今では、国道一号線と、都市計画道路（中島――寒川線）が交差したところで、交通の要所となっています。

12 車地蔵

昔本村の前ノ田に、おいねという美しい娘が、住んでおりました。
誠に気立てがよくて、心を寄せる若者が大勢おりましたが、おいねは耳を傾けもせず、暗くなるまでよく働き、まずしい家を、助けておりました。
おいねの住んでいるあたりの一帯は、殿蔵（とのやぶ）などといって、幕府のご料地になっておりました。
ご料地というところは、ほとんど手をくわえないところで、草や木がおいしげっていて、昼でもうす暗く、きみのわるいところであり

ました。
そんなさみしいところを、おいねは秋のとり入れに、精をだしているのでありました。
「おいねさん、わしの嫁になってくれ。」
若者に声をかけられたおいねは、はずかしそうに、ただ笑顔をかえすだけでありました。
前の田の美女をもとめて、近隣からも、若者がおしかけてきました。
「なんとか娘を、ものにしよう。」
と若者が集まってくるのでありましたが、おいねに軽くかわされてしまうのでありました。
その頃の本村は、家の数はかぞえる程しかありませんので、村祭りが終って家に帰る道すじは、本当にさびしいものでありました。
本村にかぎらず茅ヶ崎の村々は、いずこも同じで、ほとんどが畑と田にかこまれて、さびしいところでありました。
ある時おいねは、祭りの帰り、隣り村の基兵衛に声を掛けられたのでありました。
基兵衛は、

「母上にこれを届けてほしい。わしは貴女を嫁に迎えたい。」

と畑の収穫物を渡すのでありました。どこの家でも生活がやっとで、食べるものもない時代でありましたので、母に対する基兵衛の心づかいに、すっかりおいねは、まいってしまったのでありました。

おいねと基兵衛とのあいだに、愛は広がっていくのでありました。

二人は人目をさけるように、夜ごと会っておりましたが、ある日、突然男は車坂での約束を、裏切ったのでありました。

それとは知らず、おいねは車坂で、つかれ果て朝露にうたれて倒れてしまいました。

この基兵衛、今でいうプレイボーイでありまして、あらゆる女に手を出しては、こまらせている問題青年でありました。

おいねはそれから、病にとりつかれたように、車坂へ連日立つのでありました。

日がたつにつれて、おいねの顔はやつれ果て、気が遠くなっていくのがわかりました。

ある時、車坂で、

「基兵衛は、ほかの娘と夫婦になった。」

と言う話を耳にしたのでありました。

おいねは、心やさしい娘でありましたが、一途な恋心は、小さな娘を痛め、憎しみに変えてしまったのでありました。

「ひどい男、あの人は私をおいて。」

そう思うとおいねは、三日三晩基兵衛の家を探し歩きました。

目は血走り髪は乱れ、狂人のようになってしまったのでありました。

その夜、突如として夜空を焦がすように、基兵衛の家から、火の手があがったのでありました。

「村の衆、火事だ――。」

おいねは、静かに放心したように、そこに立っているのでありました。

おいねは、火を放った罪として捕えられ、火あぶりの獄門に処せられてしまったのでありました。
そしておいねが処刑された畑を村の衆は、獄門畑と呼ぶようになりました。
すると村では不思議なことが、つぎつぎとおこったのでありました。獄門畑の作物は秋になっても実のらず、村には突如病気がはやって、人々を苦しめたのでありました。
また夜獄門畑を通ると、どこからともなく、キ、キ、キ、キーと車のきしむ音が聞こえてくるのであります。それはおいねの叫び声のようだというのでありました。
「これはきっとおいねが、呪っておられるのじゃ、あんないい娘が、惨い殺されかたをしたので、どうだ村の衆、おいねを供養してやったら。」
という事で、人々は獄門畑のすみに、地蔵さまをたてて供養したのでありました。

すると村から病人も消え、あの不気味な、車のきしむような叫びも聞こえなくなりました。だが、誰れ言うとなくこの地蔵様を、車のきしむような音から「車地蔵」と呼び、おいねの悲しい物語を語り伝えているのであります。今では「車地蔵」は、畑から海前寺に移され、嫁入り前の娘がおまいりすると幸があると言い伝えられ、お地蔵様の前には、お供えものがあとをたちません。

13 汨橋

これは東海道が広がる前のお話です。

水島清司さん（本宿町二―二）のお婆さんで、今は亡き、水島カツさん（江戸末期の生まれ）のお話です。

水島さんの屋敷は元は東海道のふちにあり、南側は田んぼが広がっていて、小和田の六件百姓のひとつに数えられていました。

その田んぼの辺りから川が流れてきて、それでここに土橋がずうっと、

北の方へ向かって、かかっていました。

東海道は今の半分しかなくて、砂利道でありました。

ここにかかっていた橋が汨橋（なみだばし）です。

汨橋は一間半くらいの石が敷きつめてあり、石と石の間から、砂がパラパラと、川に落ちていました。

水はきれいで、山側の大きな川へ流れこんでいました。

大きな川は中川といって、これが段々千の川へ流れていって、相模川へと合流していました。

カツさんは土地の人で、水島家に嫁に来ました。だからよく徳川さんの参勤交代なんか娘の時分見ました。

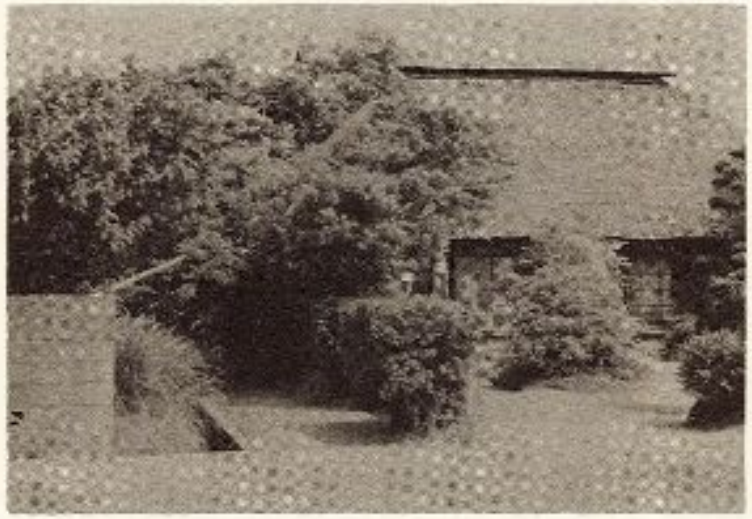
「下にーッ、下にーッ」

といって聞こえてくると、怖いからみんな家の戸をしめて、畑にいる者は、麦のあいだへ身を入れて、通り過ぎるまでかくれていました。

ところが紀州の殿さまは、あれは御三家だから、行列が半日ぐらいずうーッとながく続く。

東海道南湖の大名行列

「下にーッ、下にーッ」
とむこうの松原の方から聞こえると、もう半日ぐらいは、村人は小っちゃくなっていました。
で小っちえ大名ですと、
「下にーッ」
と言ってすぐ通って行ってしまう。
江戸時代ここは相模国小和田村といっていました。
家の隣が名うて（名士のこと）でした。
この時分の小和田村は、大名の地でなく幕府直轄の地でありました。
ですから、年貢米など納めるには、代官所から来て、みんな年貢米をきめたのです。
今の茅ヶ崎高校の東側、京急自動車学校のところが、大きい六本松の刑場でした。
それで、水島さんの家のところが汨橋で、ここまで唐丸籠（とうまるかご）で罪人が後手にしばられて担がれてきます。
そうすると、この汨橋のところで必ず休むのです。
それで処刑の罪人は、正気になり涙を流します。



ところが、「御赦免」と言って追ってがくると、

「この罪人は殺しては具合が悪い。ひとつ面じてやってくれ。」

御赦面ということで、もう嬉しくて泣く人あり、このまま刑場に向かう人の涙あり。

泪橋で東（江戸）へ行く人は助かる人、西へ行く人は六本松の処刑場です。村人が歌ったのか、それともサムライが歌ったのか、

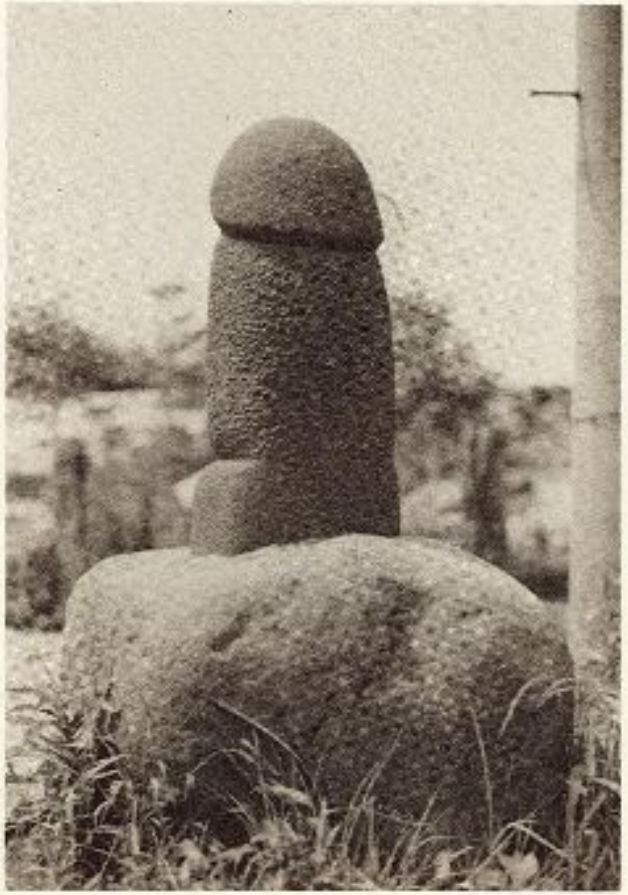
〈行こか、行くまいか、ここが思案の泪橋……

という悲しい歌が残っています。

14 性の神

本宿町内、東海道の北側に珍しい道祖神があります。この道祖神、古き昔は性の神さまといわれていました。

男のすばらしいシンボルの中に、男女抱擁の石神像を彫り込



んであります。性は尊いものです。

夫婦とはどんなにすばらしいものか、この地球上、何十億という人がいます。その中から選ばれた男女の二人が、一つの屋根の下に生活し、苦しみ、楽しみ、喜び、悲しみを分かちあい一

生を共にします。性があって愛が生まれ、愛があるからこそ、性は満たされるのです。性の神は、殖産、平和の神です。夫婦和合は、円満な家庭をつくり、親と子の間にみぞはできないのです。

新倉勝治さん（本宿町四八一番地）は、

「本宿町内の者が建った。正月十四日は道祖神の日で、セイトマツリをする。門松、お飾り、お礼を焼き払う。書き初めを焼いて、高く舞い上がると、字がうまくなる。焼いたダンゴを食べると風邪をひかない。

本宿町はこの祭りが昔から盛んで、老若男女が大勢でダンゴを焼き、子供にはお菓子が出る。

燃えている火にあたっていると病気をしないといって、昔の若衆達は、夜中の十二時頃まで話がはずんでいた。

今はテレビだのがあるから、早く帰ってしまう。

今、建っている道祖神の石をめくると、男の局部と、女の局部が彫ってある。

昔の人はこんなものを彫って、極端だと言えば極端だが、あれは立っている石事態が極

ちがさきのダンゴ焼

端だ。ちょっと見たんじゃ、分かんねえけれど、帽子をかぶってるみたいだからね。昔からこの場所にあったのだが、本宿町内の者が石屋さんにたのんでつくりかえた。

昔からある古いものだ。わしもセイトの時は、お飾りなどが山のようになってしまうから、かたずけにくるんです。」

15 河童どっくり

登場人物
○母河童
○子河童
○五郎兵衛
○村人A
○村人B
○馬の青

一、景色　間門川のほとり

解説　ここはその名も恐しい魔門川（間門川）であります。古びた土橋は西久保と大曲をつないでおります。青々と澄んだ水には相模の霊峰大山の影を映し、よしやあしのざわめきにも、そぞろ物さびしさを

感じさせます。

今は昔、茅ヶ崎は西久保に、五郎兵衛という、正直なおじいさんがおりました。一人暮しではありますが、毎日毎日馬を引いては、暁に星をいただいて仕事に出掛け、夕方には月の影を踏んで帰るという、働き者でありました。

では、間門川河童どっくりの一説、茅ヶ崎あたりに今も伝わる面白いお話であります。

子河童「お母ちゃーん、僕お腹が空いたよ。」

母河童「いい子だから待っているんだよ。」

子河童「いやだい。いやだい。僕お腹がペコペコだい。」

母河童「仕様のない子だね。今何にもないんだから。」

子河童「何か無いのーねえー。」

その時はるか彼方に馬の足音。

母河童「あっ、誰か来た。今ね食べ物取って来るからね。静かに待っているんですよ」

二、間門川の土手の上

（舞台に向かって右の方から、五郎兵衛が馬を引きながらあらわれる。）

五郎兵衛「青や。もうじきだ。さあ、つかれたろうな。いそいで帰ろう。そして、お前の好きな人参をたくさん食べさせるからな。あっ、そうだ。その前に青の汗を流してやろう。さあ、川へ入るんだ。ドウドウ。」

三、川の中

五郎兵衛「さあ、足から洗ってやろう。俺もなあ、こうやって、おまんまもそして好きな酒ものめるのも皆な青のおかげだ。ありがてえ。ありがてえ。そら今度は顔

を出しな。」
突然、青は高く飛び上がる。
青「ヒヒヒ……ン」
五郎兵衛「青や、青や、どうしたんだ。どこか痛むのか、青よ、どうしたんだ。」
五郎兵衛、青をながめる。
五郎兵衛「わあー怪物だー!!」
五郎兵衛おどろいて、後ろに飛びのく

五郎兵衛「おーい、村の人、村の衆やーい。来てくれえ。青が大変だあ。助けてくれ」
（五郎兵衛、舞台右の方に向かってさけぶ。右手より、村人Aと村人Bがあらわれる。）
村人A「何だ、何だ。どうしたんだい。」
村人B「五郎兵衛さん、どうしたんだ。」
五郎兵衛「そっそっそっ、そこに、ほ、ほーら、馬の尻の所に――。」
村人A「どこだい、あっ本当だ、何だ、あれは!!」
村人B「変なものがついてるな。やっちまえ。」
村人A「合点だ。この野郎!」
村人B「こいつめ、えーい!」
（三人、河童にとびかかる）
母河童「痛いよー痛い!かんにんして下さい。」
村人B「何をやかましいや。」
村人A「そうだ、そうだ、俺もついでに、こいつめ!!」
母河童「許して下さい。お許し下さい。もう決して悪い事は致しません。」

（母河童、手を合わせる。）
村人A「やかましい、こいつをしばってしまえ。」
村人B「じたばたするな。」

四、木にしばられている河童

母河童「えーん、えーん」
（子河童、舞台に向かって左手からあらわれる。）
子河童「お母ちゃん、どうしたの、僕お腹空いちゃったー。」
母河童「お母ちゃんね、悪い事をしたんで、こんな目に合ったんだよ。」
子河童「お母ちゃーん、かんにんしてよ。」
（泣きながら、母河童にだきつく。）
母河童「お前も決して悪い事するんじゃない。お母ちゃんみたいになるからね。ほら、誰か来た様だから早く川の中に入りなさい」
（子河童、うなずいて、舞台左手に姿を消す。
舞台右手から五郎兵衛があらわれる。）
五郎兵衛「こら怪物め、悲しいか。あんないたずらするからだ。だから、こんな目に合うんだ。」
母河童「本当に申し訳ありません。どうか、命ばかりはお助け下さい。今度は決して人様に迷惑を、お掛け致しません。」
五郎兵衛「本当かい。そんなことを言って又やるんだろう。」
母河童「とんでもない。もう決して悪い事は致しません。この通りです。ほら、子供が川の中で私を呼んでいます。」
子河童「お母ちゃーん。」
（子河童、声だけ。
五郎兵衛、舞台に向かって左手を見る。）
五郎兵衛「本当だ。悪い事をしなければ、子供に免じて許してやるが、いったいお前はどうしてあんな悪い事をしたんだい。」

母河童「はい、私はこの間門川に古くから住んでいる河童でございます。
今日は、飛んだ悪い事をしましたが、これも皆可愛い子供のために、食べ物を探していた訳です。この河童の社会も食べる物もなく、毎日、毎日、子供は腹をすかして泣いております。
今日は丁度子供が泣いている所、あなた様の馬を見つけ、そして少しの肉でもと思って、お尻にかじりついた訳です。どうか、そういう訳ですから、お許し下さい。
決して人様に迷惑をかける様なことは致しません。どうかお助け下さい。」
五郎兵衛「へえー。お前が河童かい。わしあ、初めて見たよ、そうかい。そう言う訳だったのか。可哀想に。じゃあ、なわを解いてやるから、もう決して人の前に出るな。さあ、子供の所へお帰り。」
（五郎兵衛、なわを解いてやる。母河童、一度おじぎをする。）
母河童「ありがとうございます。この御恩は一生忘れません。」
（五郎兵衛、うなずく。母河童、舞台に向かって左手に消える。

五、五郎兵衛さんの家

五郎兵衛「あ―今日はよい事をした。河童も喜んで、川の中へ入って行ったっけ。どりゃ、わしも寝るとしようか。」
（舞台に向かって右手の戸口の方から声）
母河童「今晩は、今晩は、五郎兵衛さん、開けて下さい。」
五郎兵衛「誰だい。今頃戸をたたく人は。」
母河童「私です。今日間門川で助けていただいた河童です。」
（五郎兵衛、舞台に向かって右手、戸口の方に行く。
五郎兵衛「何だ河童か。今開けてやるから待っていろよ。」
（戸を開ける。河童中にはいる。）
母河童「五郎兵衛さん今晩は、今日はどうもありがとうございました。あなたのおかげで命が助かりました。そのお礼にまいりました。」
五郎兵衛「わしにお礼だ？よしてくれよ。お礼なんぞいい。早く子供の所へ帰んな。」
母河童「いいんです。五郎兵衛さんは、お酒が好きでしたね。」

五郎兵衛「うん、大好きだ。」
母河童「それはよかった。
　このとっくりは、私の先祖代々の宝で、このとっくりからは、おいしいお酒がいくらでも出ます。ですが、とっくりの底を三ツたたくと出なくなります。」
五郎兵衛「そうかい、そりゃあ、ありがたい。
　じゃあ遠慮なくいただきますよ。」
（五郎兵衛、とっくりをうけとる）
母河童「じゃあ、夜が明けないうちに私は帰ります。失礼いたしました。お元気で。」

（河童、舞台に向かって右手に帰っていく）
五郎兵衛「ありがとう、もう決して人の前に出るな。子供を大事にな。さようなら。」

六、五郎兵衛さんの家

　解説、五郎兵衛さんは、とっくりをもらうと又、ぐっすりと眠ってしまいました。翌朝。

五郎兵衛「どれ、青と又一緒に働きに行くか。」
（五郎兵衛、床においてあるとっくりを見て）
五郎兵衛「おや、とっくりがあるぞ、何だろう。」
（五郎兵衛、少し考えて）
五郎兵衛「そうだ、昨晩河童がくれていったっけ、あれは夢じゃなかったのか。一つものはためしだ、やって見よう。」
（五郎兵衛、とっくりと茶わんをもってすわって酒をついでみる）
五郎兵衛「おや、本当に酒が出て来た。飲んで見よう。だがまてよ。河童の奴うそを言ってるんじゃないだろうな。」

（五郎兵衛、のんでみる）
五郎兵衛「おっ！、本物の酒だ。どりゃ、もう一杯。
本当になんてうまい酒なんだろう。
今日は働かずに、酒でも飲むとしようか。」

――暗――

解説、それからと言うもの、五郎兵衛さんは、朝起きては飲み、飲んでは眠り、まったく来る日も来る日も、酒びたりになりました。
（舞台中央明かるく。中央で五郎兵衛、酒を飲んで歌っている。舞台向かって右手より村人A登場）
村人A「おや五郎兵衛さん、又飲んでるのかい。」
五郎兵衛「おー、誰かと思った。まあ上がって一杯やらねえか。うまい酒だ。」

村人A「よしな、体に毒だ、朝から飲んでいたんでは、おまんまにもならねえ。」
五郎兵衛「まあそう言うな。一口飲めよ。」
（五郎兵衛、茶わんを村人Aの方に出す）
村人A「俺は、酒は大嫌いだ。」
五郎兵衛「ちえっ、話のわかんねえ奴だ。お説教はたくさんだ。早く帰んな。わしはな、酒さえあればこんなうれしい事はねえんだ。働く奴は大バカだ。飲んで歌でも歌っていた方がよっぽどおもしれえや。
あーこりゃ、こりゃ……と。」
村人A「こんな人じゃなかったんだがなあ、本当によく働く人だった。酒っておそろしいもんだ。わしあ、いやだ。いやだ。」
（村人Aひとりごと）

――暗――

解説、そしてまた数日後

――明――

（五郎兵衛、前と同じく中央。舞台向かって右手より、村人Bがあらわれる。）

村人B「今日は、五郎兵衛さん、いるかい。」

五郎兵衛「いるよー。誰だい。ま、上がって一杯やらねえか。」

村人B「また飲んでいるのか。仕様のねえお人だな。よく金が続くなあ。わしは不思議でなんねえ。こう毎日酒ばかり飲んで。わしなんぞ一日働いたって、食うに一ぱいだ。」

五郎兵衛「へへへへ、そう言われりゃ面目ねえが、これには深い深い訳があってね。人には教えられねえ。」

村人B「だけど、酒だけはやめた方が、身のためだ。」

五郎兵衛「又、お説教かい。やめてくれ。わしはこのとっくりが可愛いくてね。」

（青が一声いななく）

村人B「おや、青じゃないか。」

（舞台向かって、左手を見る）

村人B「五郎兵衛さん、青はえらくやせたね。かわいそうに、お前が酒ばかり飲んでるから、見ろ、青は骨と皮ばかりになって。」

五郎兵衛「うるせえや。そんな事わしの知った事か。」

村人B「勝手にするがいい。」

（村人B、舞台に向かって右手に去る）

五郎兵衛「待てよ、わしも河童のおかげで、こんなよい気持になったが、村の人も言っていた。酒ばかり飲んでいたって仕方がない。

それに青はどうしたかな。青よ、青。」

（舞台に向かって左手より、やせコケた青がよろよろ出てくる。ようやく、青の様子に気がついた五郎兵衛は、涙を流して青にすがりつくばかり）

五郎兵衛「青、青、わるかった。かんにんしてくれー。あーわしが悪かった。働く楽しみをすっかり忘れてしまった。それじゃあ、人間の道がきたねえ。照る日を闇に暮したんでは、本当に申し訳がねえ。そうだ、そうだ、この腕、この足がある。元の人間になろう。そして、又楽しく青と二人で働こうな。そうだ、河童

がいったっけ。とっくりの底を三ツたたけば酒が出ないと。一つやって見よう。そら一、二、三……本当だ。逆さにしても出なくなったぞ。」

七、間門川の土手

（舞台に向かって右手より五郎兵衛と青がでてくる）

五郎兵衛「青や、わしも元の人間になったんだ。一杯の酒でおぼれかけていた。酒は身を亡ぼし、家を倒すもんだ。危ない、危ない。わしは青のおかげで助かった。なあ青よ、一生懸命働こう。」

解説、こうして五郎兵衛は、元の姿となり、又毎日、毎日青と一緒に朝早くから夜おそくまで働いたという事です。

16 一里塚

一六〇四年（慶長九年）江戸幕府は、街道を整備しました。その時、東海、東山、北陸の三道に、旅の目印や、いこいの場として一里塚をつくりました。茅ヶ崎にあるのは、その時のもので、日本橋から十四里目のものです。昔は、二つの塚がありましたが、北側のものは今は、ありません。

17 七里役所

七里役所

〈東海道は　松並木――
小松町には
紀州の殿様の
七里役所があった。
そこには、
殿様のたいせつな
手紙を
宿場の人足が
リレー式に運ぶ
七里飛脚（継飛脚）
がいて、
たいへんいばっていた。

18 室田八王子神社

室田八王子神社の社殿は、江戸中期の作で、神仏建築を巧みに織りまぜ、彫刻も、壮厳華美である。茅ヶ崎に残る古い建築の最もすぐれたもの。

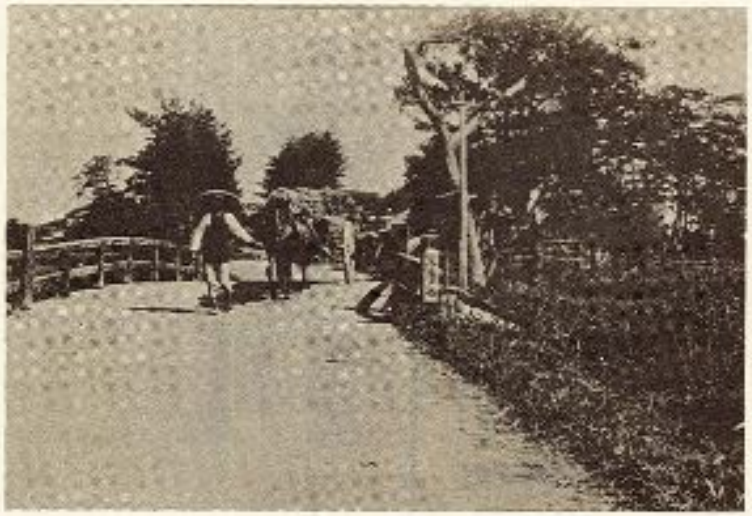
19 十間坂（じゅっけんざか）の地名

当時の旅人は、京都から鎌倉を結ぶ街道の中で、特に景観であった茅ヶ崎の砂丘の地を「十景坂」と名付け旅のつれづれを楽しんだ。十景坂は遠く伊豆富士、箱根、三浦方面を、又遠くは江の島茅ヶ崎の海が一望された

20 南湖の左富士

ここは東海道でもすばらしく景色のよいところです。街道（江戸～京都）の左がわに富士が見えるところはここしかありません。そこで広重はこの左富士景観の地を版画に刷って後世に残しました。

五十三次名所、南湖の左富士



茅ヶ崎名所、（上）鳥居戸橋（下）松尾橋

21 浄見寺

浄見寺は、徳川中期の名奉行を生んだ大岡家の知行地である。

境内左手の高いところに、大きな木に、かこまれて大岡家一族の墓がある。

五代忠相は、一七一七年（享保二年）二月三日、四十一歳で、江戸町奉行となり、名奉行として二十年間も勤めた。

忠相公の直筆、"宝とするところこれ賢なり"は浄見寺の宝とされている。

寺の林の中には、神奈川県ではじめて発見されたお薬つきイチョウがある。

22 九代目市川団十郎

九代目市川団十郎

23 六臂の弁天坐像

六臂の弁天坐像

大岡越前守のお墓がある浄見寺には、県の重要文化財に指定されている六臂の弁天坐像（手が六本ある、普通は二本か八本）がある。

源頼朝が愛した丹後局

源頼朝が愛した丹後局

西久保村 日吉神社、妙蓮寺の西側にあるエナ塚には、こんな話がのこっている。

その昔、源頼朝は、丹後局のあまりの美しさにひかれ、愛した。

局は子をはらみ、大政所政子の知るところとなる。

怒りはげしく、そのため秘かに円崖の景義の居城へ局を預けた。

その後局は浜之郷、御花屋敷、そして頼朝が新築した西久保の桜屋敷に住み、三郎という男子を生んだ。

その エナを収めたところが、この塚である。

エナ塚と後方は、源頼朝がつぼねのために新築した桜屋敷あと

25 堤のサバかけ松

堤のサバかけ松

人がまだあまり住んでいない昔々、
堤村のすぐ近くまで海だった。
ある年、平和な堤村に
大津波がきた。
津波といっしょに、魚が降るように
降んできた。
津波はすぐ静かになった。
翌朝、村人が大きな松のてっぺんを見ると、
サバがかかっていた。
それから、村人はこの松をサバかけ松という。

26 上正寺の聖徳太子像

上正寺の聖徳太子像

上正寺は、市内でも由緒ある
浄土真宗のお寺である。
このお寺は推古天皇の時代
(六一二年)に創建されたと
伝えられる。
その当時は、下毛尾の上信
和らんと言われている所にあっ
たらしいが、お寺の風表などで、
いつの時代からか現在地に移った。
お寺にある聖徳太子像は、
茅ヶ崎市の文化財に指定されている。

27 農民の恩人

幕末、茅ヶ崎の海岸線は、
茅ヶ崎の鉄砲場であった。
海岸線に住む農民は、
年に2～3回しか使用しない
大砲の製造場だ、
食糧難に苦しむ農民に、
農地と開拓をほしい
と幕府に嘆願したが
受けつけられない。
ところが、
この場合、信濃出身の
佐々木卯之助は、無断で
農民に開拓させ、開墾させたため
遠島流罪の刑に
処せられた。

28 美人の産地柳島

美人の産地 柳島

昔、柳島の洗い
はんじょうした頃
(宝永七年)、
柳島は美人の産地
であったという。
万葉の東歌、
吉野柳歌は柳島の
田植歌であった。
吉野の ほろろ川戸に
汝を待つと 我が水はくまず
立ちどまらすも 東歌
柳島の鉄道は、みな明るく美人だ

29 二十三夜堂

昔々、南湖の村に力のない男がいて〝俺はどうして、こうもたくましさがないのか、カミナリはこわいし、夜は外もあるけない〟と一人ごとを言いながら、二十三夜堂のほこらのそばを歩いておりました。

すると近くに大きな米俵がありましたので、男は持ちあげてみようと思いました。そこで、ホコラにむかって、

「どうか、私に力をさずけてください」

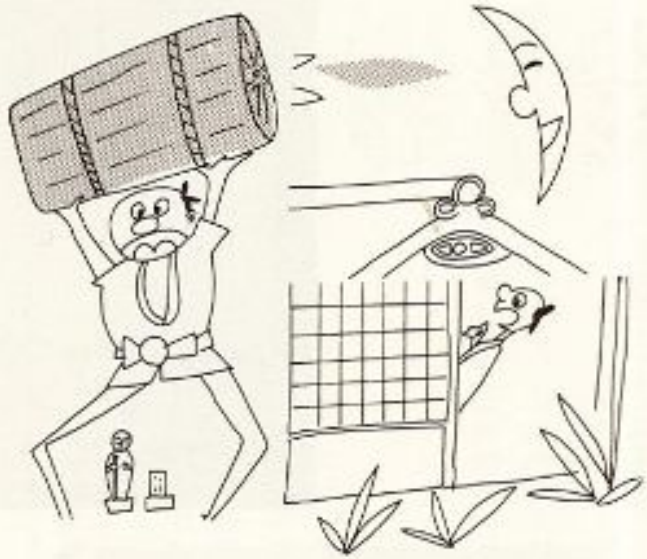
とお祈りし俵を持ちあげてみました。

すると、どうでしょう。

今まで力のなかった男にもりもりエネルギーがわき、軽々俵を持ちあげてしまいました。

この話が人から人へ伝わると、男が俵を持ちあげたという二十三日

東海道茶屋町の二十三夜堂



には、力のない男たちが集まってきては、力をさずけてもらいました。

それでこのホコラを二十三夜堂とよぶようになり、

またホコラのそばにあるお地蔵さんに願をかけると金持になったという事で、茶屋町と南湖の人たちがお金を出しあって、ホコラとお地蔵さまに感謝して、

大きなお堂をつくってあげました。

それからはこのお堂で二十三日夜、

南湖の人たちで、

お念仏が行なわれていましたが、

今は老人たちが亡くなったりしてとだえてしまいました。

30 輪光寺

輪光寺（りんこうじ）は、応永二年六月十九日（一三九五年―室町時代）にできました。

このお寺には、茅ヶ崎市の重要文化財に指定されている庚申塔（こうしんとう）があり、神奈川でも二番目に古いものです。

このお寺の住職さんは、茅ヶ崎一中の校長先生で、関治郎さんといって歌人としても有名です。

美しく　髪結いあげて　来し妻は
声すら常の如くにあらず

この歌は、鶏呼（とりよ）ぶ声という先生の出版された本の中にのっていますが、先生はとっても奥さんやお子さんを大切にする人です。

輪光寺で行なわれている〝花祭り〟（滝仏会＝かんぶつえ）は

昔から、円蔵村の人たちの楽しい行事のひとつで、いろいろの花でかざった堂の中央に尊像（そんぞう）を置いて、大人や子供が、おしゃか様に甘茶をかけて入浴させてあげるのでした。

昔のきちょうな行事が、どんどんなくなっていくこのごろですが、心のやさしい関先生は、きっといつまでも続けてくださるでしょう。

31 円蔵祭ばやし

民俗芸能の中でも獅子舞、田楽舞、式三番叟など舞に関するものは、きまりごとがあるが、祭ばやしには、そうしたきまりはない。

つまりはやしは今でいう即きょう音楽のようなもので、その場で作り楽しんだ。

能楽など上層階級でなければ楽しめなかったものを、自分たちが楽しめるようにつくりかえた。

祭りばやしは、日本の大衆が作った、最も大衆らしい音である。

鎌倉時代、円蔵の懐島景義は、農民の

エネルギーをおさえつけては、かえってまずいと思ったのか、祭り囃子を珍重した。

円蔵祭り囃子は市の文化財に指定されているが、TV、ラジオでも紹介され有名である。

ラジオ関東長崎アナウンサー「今度は、ラジオ関東の中継車を呼びだしてみようと思います。茅ヶ崎に行っている青津ナナ子さーん。」

青津アナウンサー「はい青津です。きょうは茅ヶ崎市円蔵、これは地名なんですけど、お金の円にお蔵の蔵という字を書いて、えんぞうと読みます。駅から二、三分のところなんですけれど、ここに非常に伝統のある祭ばやしが、伝わっているんです。

きょうはここの円蔵にある、神明神社にうかがいました。

これからお盆なんですけど、ふる里へ帰れない方もいらっしゃるんじゃないかと懐かしいタイコや、笛、カネを聞いていただこうという趣向なんです。」

「それでは早速各プレーヤーの紹介をしたいと思います。

会長の小山五一さんは七十五歳で、笛を担当します。常さんこと、高橋常吉さんは七十四歳でタイコ、友さん、友さーんどなた。」

小山友次さん「はーい。」

青津アナウンサー「あ、あなたね。どうもよく日焼けしていらっしゃいますね。小山友次さん七十一歳がタイコ。小室由さん七十歳タイコ。

まあちゃんこと阿諏訪正治さん六十二歳です。まあちゃんなんて、かわいらしいので、いくつかと思った。」

阿諏訪正治さん「ワッハッハッ」

青津アナウンサー「そして直ちゃんこと、阿諏訪直次さん六十歳タイコ。小島竹司さん六十一歳でやはりタイコ。かっちゃんこと小室一布さん六十歳は、どなた。はいタイコですね。そして稲岡栄三さんは七十一歳で、カネを担当していただきます。

以上九名のみなさんの演奏で円蔵祭りばやし、それでは聞かせてください。張りきってどーぞ。」

〈ステレンテン、ステレンテンテンテンテンテンテンテンテンテン

青津アナウンサー「会長の小山五一さんですね。しかし驚きましたね。私皆さんの年齢平均してみましたら、七十一歳なんですね。あんまり若いんでビックリしちゃっ

たんです。楽しいですね。表情も生き生きとしていて……。」
小山五一さん「まだまだ、ワッハッハ」
青津アナウンサー「この円蔵祭りばやしというのは、どのくらいの昔から、伝わっているんですか。」
小山五一さん「そうですね。どうしても八百年くらい前でしょう。懐島景義が円蔵に城をきずきましてね。その人がいくさのあとなど、村の人にタイコや舞をまわせたのが伝わっているようです。」
青津アナウンサー「皆さん、練習をやられるんですか」
小山五一さん「はい昔は、田植が六月に終ると、すぐタイコを出して楽しんだんです。何も娯楽がなかったですから。それで昔は、道で練習をしたんです。タイコのなっている所へゆかたがけで行って涼みながら演奏したんです」
青津アナウンサー「で今年は、いろんな夏祭りによばれて、出かけられたんですね」
稲岡栄三さん「鶴ヶ台団地とか、盆踊りとかに、にぎやかせにたのまれました」
青津アナウンサー「で、反響はどうですか」
高橋常吉さん「子供なんか喜びます。中でもバカ面、ヒョットコなんか、子供がよって

きます。
青津アナウンサー「どなたが、ヒョットコ」
小島竹司さん「小島竹司です」
青津アナウンサー「ずい分、ハンサムの人が、ヒョットコになるんですね」
青津アナウンサー「どうですか、おかあちゃんなんとか言いますか」
小室一布さん「タイコは好きなんだけど、遠慮がちにやっていると、かあちゃんが〝そんな事でどうする、一生懸命やってきなさい〟というのでやるんです。」
青津アナウンサー「じゃ、すてきな祭ばやし、もう一度聞かせて下さい。」
ラジオ関東スタジオ「はい、楽しそうで、みなさんお元気でいいですね。」
青津アナウンサー「みなさん、これが生きがいだという顔で演じていらっしゃいます。でお年寄りにも、いろいろ人生があると思うんですが、本当にすてきな事だと思いました。」
ラジオ関東スタジオ「はい、どうもありがとうございました。
エー、今日は茅ヶ崎の円蔵祭りばやしを、皆さまにお伝えいたしました。」

32 郷土芸能を継承する乙女

神輿の鐶（かん）がドサッドサッとなる音と、どこからともなく聞こえてくるお囃子の音は、祭野郎の心をゆする。

小山絹代さん（19歳、円蔵二二二二、横浜文化服装学院生）は、おじいちゃんの笛を、赤ちゃんの時分から子守唄にしていたから、囃子の音を聞くとじっとしていられない。

高校三年生の時覚えた笛は、今では、屋台ばやし、おかめひょっとこなど、器用に吹きこなす。

伝統ある郷土芸能は、彼女らの手によってがっちり継承されている。

33 南湖の漁師と赤羽根山のキツネ

昔の茅ヶ崎は、南湖方面が漁村で、北部方面は農村でありました。

家は点々と、それぞれの部落の中心のところに数軒ずつ寄せ集まるように建っていました。

その家々は草ぶきの屋根で、壁は泥でぬられ、

引戸はガタビシと音をたてていました。窓も少なくて、戸をしめると部屋の中は、暗くなってしまう程でした。

部屋の中央にはイロリがあり、薪に火が灯されると部屋の中が明かるくなって、そこが家族の話し合いの場所になっていました。その頃は、小出の山にはほとんど人は住んでいませんでした。

農道はクネクネとしていて、やっと人が通れる程の生活のための細い道でありました。その道の両はしには、背丈ほどもある雑草がしげり、せまい道をさらにせまく感じさせていて、寂しくて夜になると人の通る様子はまったくありませんでした。

ところが南湖の漁師の若衆は違いました。

朝早くから、夜中まで、そんな寂しい道を、仕事が漁師という事と、南湖の地名は茅ヶ崎を代表しているのだという誇りが心をささえているのか勇気もあり、今日も腹の底に力を込めて、浜に集まってきました。

あたりはまだ暗く、今は夜中の十二時なのでありました。

白いさざ波がおそろしい音をたてて打ちよせてぶきみでありました。

きのうし掛けた網にどれだけの魚

がかかっているのか、心を踊らせるひとときでありました。

引きあげられた魚は、漁師の若衆に担がれて、まだ薄暗い茅ヶ崎南湖の浜から遠く八王子へ、また厚木へと向かって行くのでありました。

ところが漁師が出発してからが大変なのでありました。

た。茅ヶ崎というところは寂しいところで、タヌキ、野ウサギやキツネの住み家がいっぱいありまして、悪いいたずらをするのでありました。

茅ヶ崎のキツネのいたずらは、相模の国はもちろん、武蔵の国などといたるところへ知れわたっていました。

曇天の時などは、キツネの嫁入りといって、キツネの行列がありました。赤羽根の山から茅ヶ崎の村まで、あっという間に、チョウチン行列ができてしまうのでありました。

悪いいたずらは、こんな時でありまして、魚はキツネの嫁さんをむかえる仲間のごちそうになるのでありました。

キツネのいたずらは、はじめのうちは面白がって、漁師を円蔵の辺りへ引っぱり込んだり、萩園辺り

をぐるぐるまわして歩かせたり、赤羽根の竹ヤブへ連れこんでしまったり、楽しんでいましたが、この頃では漁師の魚を全部取り上げて、キツネの嫁入りに集まった仲間のごちそうにするため、悪さはエスカレートしてきたのでありました。

赤羽根の竹ヤブから出てきた若衆は、何が起きたのか、しばらくボーッとなっていい気持で夢など見ていましたが、お陽さまがのぼり、キツネにだまされたと知ると、大変くやしがったものでありました。

どの道を通った漁師もみんなキツネにだまされて、中には鼻チョウチンで八王子に着いた夢など見ていた若衆もいたのでありました。

こんな事があっても南湖の若衆は、天びん担いで連日八王子へ向かって行きました。もち論歩いていったのでありました。素晴しい健脚のもち主ではありませんか。

なぜこんな暗いうちに浜を出発するのかといいますと、暑い夏に日中、八王子まで魚をとどけたら、魚の鮮度は落ちてしまいますし、中にはくさってしまう魚もでる事でしょう。八王子に着いた南湖の若衆は、織物の盛んな八王子から、織物を交換してきまして、愛する女房や、子供のお土産としたのでありました。厚木方面からは、畑でとり入れたサツマイモやジャガイモと換えられたりしまして、南湖の村は益々豊かになっていきました。

時々キツネにだまされて、魚はキツネの餌食になりましたが、そんな事は気にしないで、キツネをいじめたりしないで、黙々と働いたのであります。

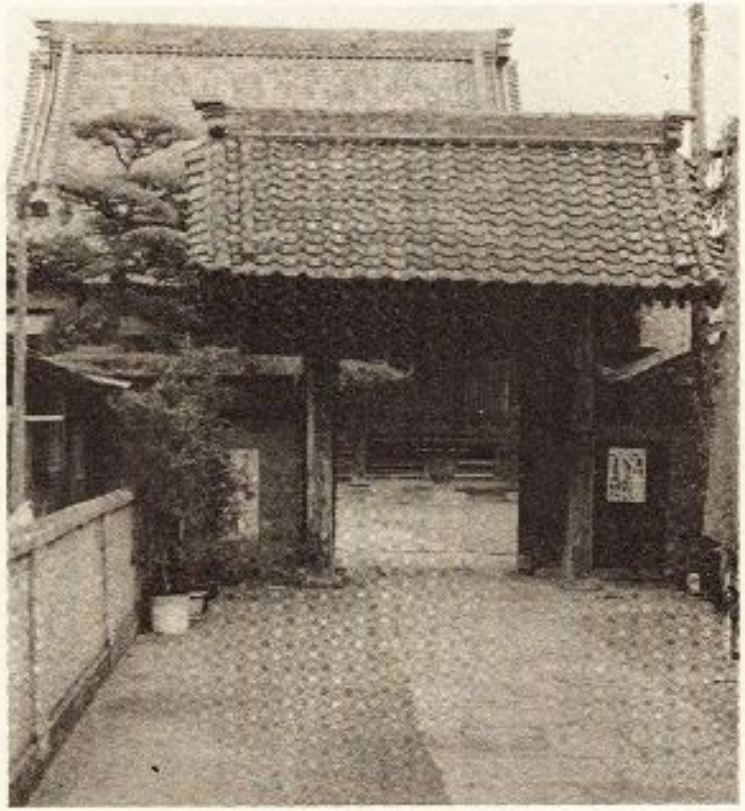
若衆達は、南湖の浜辺で、酒を汲みかわし、キツネにいたずらされた話を酒の魚に、のんびりと暮したのでありました。

34 西運寺のお十夜

南湖西運寺のお十夜は、お正月や鎮守の神さまのお祭り、浜降祭と並んで、茅ヶ崎の老若男女の心を踊らせたお祭りで、ありました。

このお祭りは十日十夜と言われ、生きている間に十日間善根を積もうと言う事で行われていました。

善根（ぜんこん）とは、



善い行ないを積むという事です。そうすれば亡くなってから千年間良い行ないをするより、その方が功徳が大きいとされています。亡くなってから良い事をするより、今この世に生を受けている間に良い事をしようという事です。

昔は今と違ってレジャーなどが盛んではありませんでした。テレビも無い時代でしたから、茅ヶ崎の農村は、お正月、鎮守のお祭り、浜降祭、十夜などを仕事の区切りとして、一生懸命働きました。

十夜の行われる十日間は、もう西運寺境内は大変な賑わいで、あらゆる路地は人と出店で歩く余地がないほどでありました。サーカス、ヘビ女などの見せ物も出て、子供の心をひきつけました。

秋は心の秋、収穫の秋――それに信仰が結びついて十夜は盛んになっていきました。柿、栗、大根など農民は秋の収穫物を十夜の祭りで阿弥陀様にお供えしました。

「この一年間無事に働く事ができました。これも阿弥陀様が守ってくれたお陰です」と阿弥陀様の恵みを供養するのでありました。

ちょうど十夜は、阿弥陀様の縁日にもぶつかっていたのであります。

昔の子供達は、十夜などのお祭りを、ひとつの生活の区切りとしていましたから、き

れいな着物を買って貰えます。それを着て親から貰った小遣を大事に袋にしまって、喜び勇んで祭りに出かけるのでありました。もちろん小遣は、この祭りやお正月などの時しかもらえません。

また農民は、この十夜の時に、一年間の農具などを交代したりしました。こわれた鍬や鎌などは新しいものと取りかえるのでありました。露店で農具を売る人達もみんな親切で、話しが合えば大変安く売ってくれたりしました。

この十夜は信仰よりも祭りとして長い間続いてきましたが、社会も変化するにしたがって三日になり、一日になったりして今では、細々と続けられているようです。

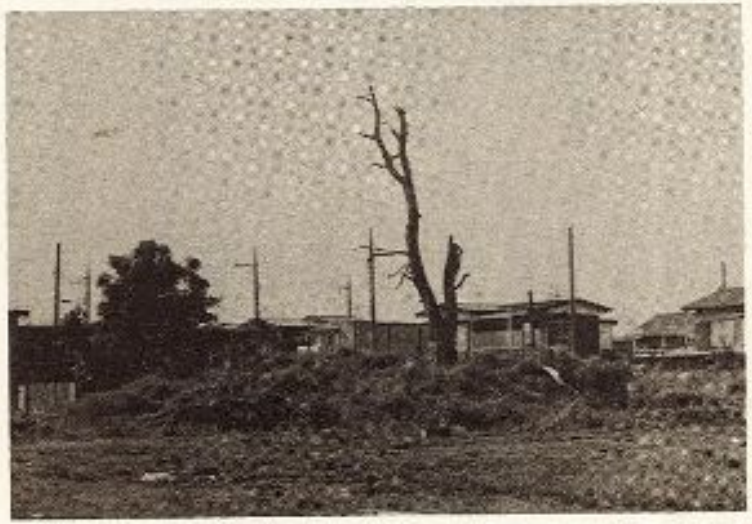
西運寺周辺を賑わせた見せ物小屋や、露店は、みんな交通事情でできなくなりました。

35 矢畑本社宮とヘビ塚

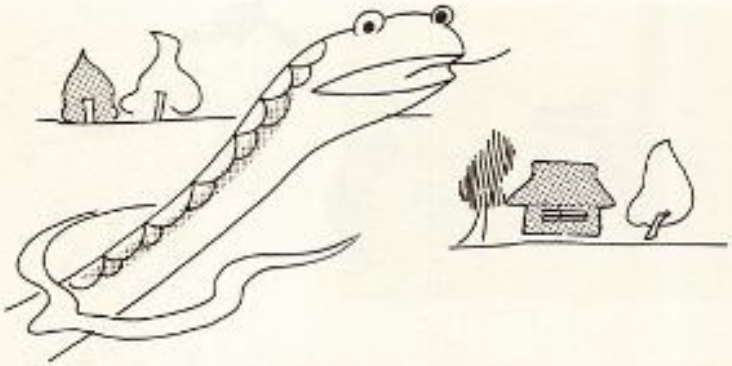
むかしむかしこの塚に矢畑のお宮さまがありました。大きな松がたくさんあり、この松を切ったものには、たたりがあると言われ、村の人は大切にしました。

この本社宮というのは、茅ヶ崎市体育館の北側で、今では田んぼを埋めたてして、まわりにたくさんの新しい住宅がたちました。

この塚へ、夜になると鶴田の丑の御前（ごぜん）から大蛇が、本社宮へ散歩に来るよう



（上）1950年代本社宮あと、後方に富士山と八丁松並木が見える
（下）松も枯れて、本社宮のあとも住宅地となった



になりました。
その時の大蛇（だいじゃ）がとおる音は、ものすごいもので、ザワザワという音が、今の矢畑バス停留所のあたりまで聞こえたといわれているほどです。
大蛇のとおったあとは、台風のあとのようで、稲がたおれているのですが、二日もたつと自然になおってしまうのでした。
この大蛇は人に害を与えないので、矢畑の村人は十人くらいで、かつぎあげたことがあるという話が残っています。
その後、
この大蛇のために矢畑の村人がヘビ塚をつくってあげましたが、新しい住宅をつくった時、道路の下になってしまいました。昔の人は生きものを、大切にしたやさしい気持の人がたくさんいたのですね。

36 高田村の平蔵

江戸時代の事です。高田の村に平蔵という剣道の非常にうまい一人の若者がおりました。

しかし平蔵はうぬぼれ高く、村でも評判の男で、〝剣〟で自分にまさるものは、誰一人としていないと信じこんでいました。ある時、近くに住む農家の老人に真剣勝負をいどみました。何度かことわられたので、老人もいましめのためにと思ったのか、何度目かに承諾しました。

そしていよいよ平蔵と老人は一戦をかわしましたが、平蔵は簡単に切り殺されてしまいました。今でも、平蔵と老人が戦った大山街道のかたわらには脇差し田という地名がのこっています。この話は何事も、うぬぼれは禁物であることを教えてくれます。

37 下寺尾のおもよ井戸

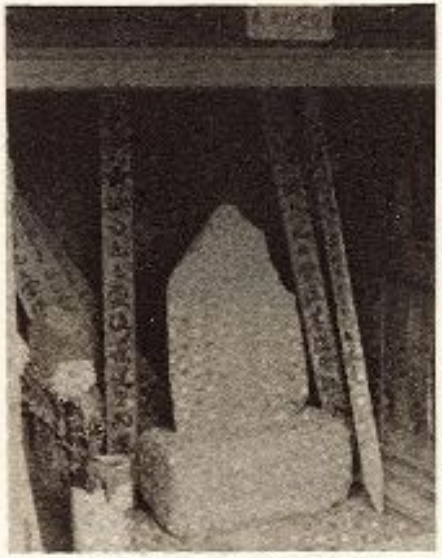
これは江戸時代のお話です。

おもよという娘が、タクワンを食べそれが歯にはさまり、歯の痛さをうったえ苦しんでおりました。娘は村のはずれの古井戸で、うがいをしようとしたのですが、あやまって井戸に落ち込んでしまいました。ちょうどその時、運悪く村はずれのこともあって人も通らず、娘はかわいそうに助からなかったのです。それから幾日か経ったある日、この村を通りかかった若者が、ちょうどこの古井戸にさしかかり、いっぷくして、のどのかわきをうるおそうと水をくんで飲むと、さっきまでいたかった歯がピタリと止まってしまったのです。

すっかりおどろいた若者は急ぎ村人に話しました。それ以来歯の痛い人は、この水を飲んで痛みをとったと云うことです。

38 白浪五人男・南郷力丸

白浪五人男の南郷力丸は江戸時代、茅ヶ崎に住んでいました。力丸は茅ヶ崎南湖の舟持ちのむす子で、江戸「白浪者（しらなみもの）」といわれる土地の不良仲間の兄貴株でした。そして南郷力丸と名乗っては、善良な町人をおどしたり、コソ泥を働いていました。



ちょうど今のチンピラ、ぐれん隊のようなもので、南湖から江戸に進出して、悪事の数々も命運つき、鈴ヶ森で、うち首となりました。

……このため、力丸の罪は別として、気の毒に思った南湖の人が、供養に建てたのが、力丸地蔵（西運寺境内）です。

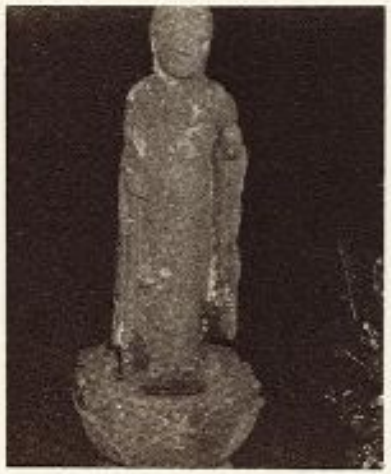
茅ヶ崎浜そだち南郷力丸

南郷力丸「さてどんじりにひけをしは　潮風あらき
小ゆるぎの磯なれの松のまがりなり、
人となったる浜そだち、仁義の道も白河の
夜船にのりこむ船盗人。
浪にきらめく稲妻の白刃でおどすべごろし、
背おって立たれぬ甲斐とがは
その身におもきたのの石、悪事千里と
いうからは、どうでしめえは木の芯と、
かくごはかねて鳴立沢、
しかしあわれは身に知らぬ、
念仏ぎれえの南郷力丸」

稲瀬川勢揃いの場

（白浪五人男、日本駄右衛門、弁天小僧
忠信利平、赤星十三郎、南郷力丸）

39 加賀屋敷のお地蔵さん



寛延元年（一七四八年）十一月十四日にできたお地蔵さんは、西久保加賀屋敷（西村精治さん宅）の東側に立っているが、ある年宝生寺の庭に移した時、毎晩のように子供の泣く声がする。おしょうさん不思議に思って外に出てみると、涙をいっぱいためた加賀屋敷のお地蔵さんであった。心のやさしい宝生寺のおしょうさんは、わけを聞くと、

「こんな所に移されて寂しい。加賀様のお屋敷に帰りたい」と泣くのであった。

おしょうさんかわいそうになり、もとの所に帰してあげた。それから西久保村の人々は、お地蔵さんをかわいがると、子供が丈夫に育つといわれ、いろいろなお供物をしてお地蔵さんを大切にしました。こんど西久保を通った時、このお地蔵さんを見てください。とってもかわいらしいですよ。

40 三日月さま

西久保村を三日月さまが、こうこうとてらしています。

「柿もクリも、畑も田んぼも今年は豊作だった」

明るい笑顔の村人を、この三日月さまは、やさしく見つめていました。

ヤブの中にある小さなホコラにも、あたたかい光がさしこんでいきました。

このホコラは、村人たちから、三日月さまと呼ばれていて、月のきれいな日、村人の願いをかなえてくださるという事で大切にされておりました。

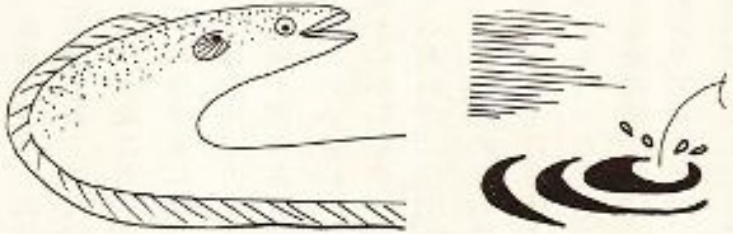
この話は、あまり古いのでいつごろから伝わるものか、村人にはわかりませんが、〝願いごと〟を聞いてくださる〝ありがたい〟三日月さまというので、江戸時代村は大勢の人でにぎわったということです。

願いごとを聞いてくださるありがたい三日月さま

特にこの三日月さまに、願いをかけると、イボとかジによくきいたという事です。願いのかなえられた人は、三日月さまの大好きな、おとうふをそなえました。その後願いをかなえられた円蔵の大工が、三日月さまの家をつくり、西久保七一七番地小沢功さんの屋敷にまつってあり、今も秋の三日月さまの日は、おとうふをあげて大切にしています。

41 地蔵が淵のとね坊

昔々それはそれは、とても釣の好きな若者がいましてネ。
毎日毎日近くの地蔵が淵（浜之郷）に行っては、村人と釣糸をたれながら、話をするのが好きだった。
地蔵が淵は、アシなどが生い茂っていてチョッとぶきみなのだが、沢山魚がいたんだネ。
きょうも若者は、近くの地蔵が淵にでかけていったネ。
ところがこの日はにわかに空がかきくもって、今にも雨が降りそうなので、村人

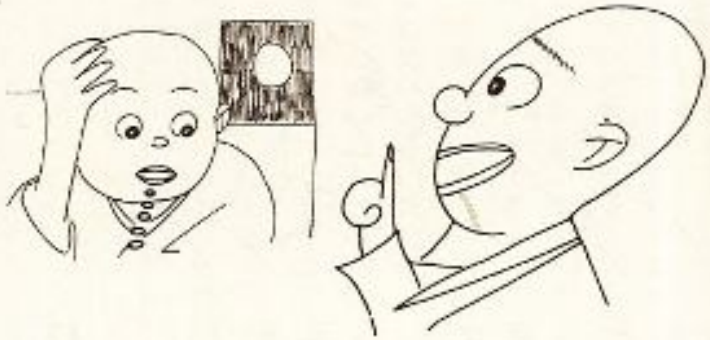


はだれも来ていなかったんだ。
「どれ、きょうはコイでもつかまえるか、ドッコイショ」
若者が釣糸をたれたかと思うまもなく、うきがスーッと、水中に消えてしまったネ。
「ハーテ、これはどうしたことか」
釣糸を引くと
「なんとデッカイ、うなぎがかかったではないか。」
若者は
「うひゃー」
と大口をあけたまま、うなぎをズタ袋におしこんで、スタコラサと、いちもくさんに、我が家へといそいだネ。
そして、村人に見せびらかしたあと、みんなを招いて、ウナギのスタミナ料理としゃれこんだネ。
ブツブツに切られたウナギは今大きななべの中に入れられようとしている、とその時外から

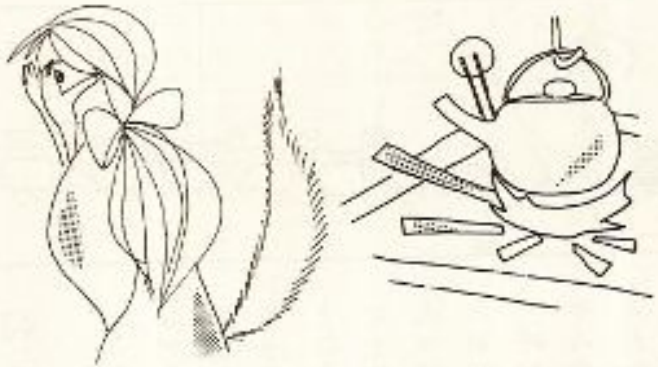
「地蔵が淵のとね坊やーい」
と声がするではないか。
その声が聞こえると、今プツプツに切られていたウナギは、鍋のフタをブッ飛ばして、もとのウナギになっちゃったんだね。
村人はビックリぎょうてん。
「地蔵が淵の主にちげえねえ」
なんていい合いながら、
腰をぬかしちまったんだ。
そのあいだにウナギは、
「地蔵が淵のとね坊やーい」
の声とともにさあっと外に
消えちゃったという。
……その時、外は
ドシャブリの雨が、
降っていたんだとサ。

42 タヌキ塚

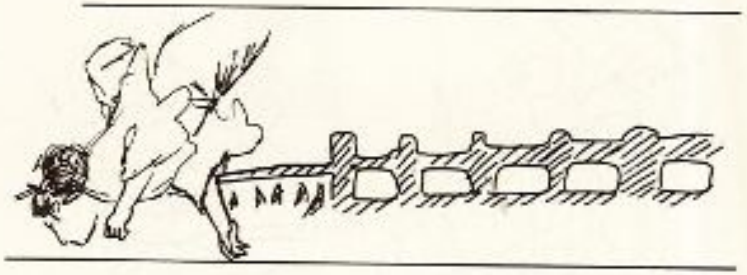
「こんばんわ。おしょうさん、きょうも楽しいお話を聞かせてくださいな」
毎晩、毎晩きれいな娘さんが、このお寺（まんぞう寺＝赤羽根三五三番地、城田巧さん宅内）を訪ねるようになった。
「私は、話を聞かせるのが商売のようなもんだが、あんたの話もとってもおもしろい。話しじょうずは聞きじょうずと言ってな。人の話は、よく聞くものじゃ。話の聞けるあんたは、とってもえらいぞ。」
「ハーイ。おしょうさんよくわかりました」
それからというもの秋の夜長、二人の会話はいつまでも続いた。
「あなたは、このあたりに悪いタヌキがいて、村人に迷惑をか



けているのをしっているかい。困ったものじゃ。
また子供のあいだで、こんなくだらない歌がはやっている。
♪タンタンタヌキの金玉は、風のないのにブーラ、ブラ」
「さあきょうは、お祭りの話しだ。
にぎやかな笛やタイコの音が風にのって、聞こえてくるじゃないか。ほら、聞こえるだろう。
――この秋祭りというのは、毎日汗水ながして、まじめに働いたかいがあって、今年も豊作だった。
きょうはお百姓さんが一年に一度、仕事を休んで神さまに感謝し、ともによろこびを、わかちあうためのめでたい日なんだ。
くるしかったこと、つらかったことも、この祭ばやしが鳴りはじめると、心も体もすっかりなごやかになって、収穫



のよろこびにかわるというふしぎな話しをね」
「それじゃおしょうさん、いいお話をどうもありがとうございました。ごきげんよろしゅう」
帰りかける娘のうしろ姿に、タヌキのシッポが見える。おしょうさんビックリするとともに、さみしい気持にさせられた。
「お前はタヌキだったのか、娘に化けて、悪い事をしようとしたのだな。本当のタヌキなら八畳敷の金玉に化けられるだろう。」
タヌキは、ほいきたと化けた。そこへ真赤に焼けている火ばしをつけると悲鳴をあげて逃げていった。
翌朝黒こげのタヌキを見つけた。
「殺すつもりはなかった。かわいそうな事をした。けだものといえども、秋の夜長の楽しかった事」とおしょうさん、タヌキのお墓をつくった。これがタヌキ塚



43 千の川

川の上流、一本松の北のあたりに、本村から矢畑に通じる里道がありました。

昔々この道を大勢のチョウチン行列に守られて、お千(せん)という花嫁さんが、矢畑の方へむかって歩いておりました。

ところが、ちょうど土橋のところまでくると、お嫁さんは、橋の上から、ザンブと川に飛び込んで消えてしまいました。

人々は、あわやとおどろき

「おせん、おせん」

と呼びましたが、すでに水アワも消えて、答えるものは、ただやみ夜の水のせせらぎばかりでありました。

それから、この川を千の川と名ずけました。

里人の語るところによれば、

このお千は、キツネのいたずらであると言うのです。

ある年、丑の御前(ごぜん)で、本村の男の人をだましたのですが、その男の人が純情であったことから、キツネは

「この人と結婚したい」

と一途に考えました。

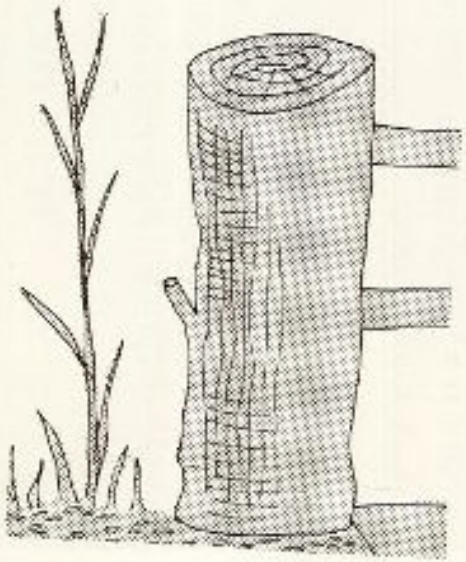
人間の美女〝お千〟に化けて、この日をむかえたのですが、

キツネの仲間から、

「もうキツネの世界へもどれない」

「純情な花婿をだましてしまった」

苦悩のすえ、キツネは消えてしまったというのです。



44 下寺尾の七堂伽藍

昔々のお話です。下寺尾に七堂伽藍（海円院）というお寺がありました。このお寺は大変大きくて、お灯明がつくと、茅ヶ崎の海が明るくなって、魚がとれないと漁師を困らせるほどでした。このころの海は、今の香川のあたりまできていて、円蔵や浜之郷は懐島という島でした。

七堂伽藍というのは、とても大きな建物のことをいいます。そこで堂の庭は、今の香川駅前のところまでありました。

ある日このお寺の尼さんが、漁師から

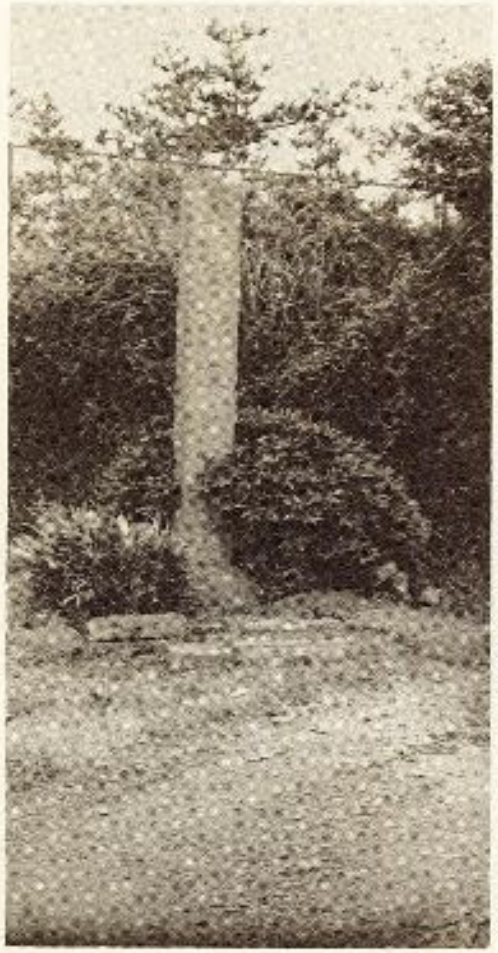
「お灯明の光で、魚がとれなくて生活が苦しい」

と涙ながらにたのまれ、お寺に放火してしまいました。

火のいきおいは、ものすごく茅ヶ崎の海を真赤に染めました。

それからというもの、茅ヶ崎では沢山の魚がとれましたが、尼さんは放火の罪で火あぶりとなりました。

今でもその時の火事で、ころがり落ちた鐘がうまっているという事で、鐘が橋（今は寺尾橋）という名が、そして村の下の方にお寺がある、という事で下寺尾という地名がのこっています。



45 花女郎道

今宿の里、東海道を北に入ると村の鎮守、松尾神社があります。境内には大樹がうっそうとして、昼でも暗く、行きかう里人はあまりありません。

ある年のたそがれ時、萩園の里から、籠を先頭に、十数人が通り過ぎて行きました。この人たちは、婚礼の一団でありました。今宿の里で休憩し、籠をおろし、花嫁を見れば、死んでいる。然も頭がない。籠を担ぐ若者は、腰を抜かす驚きでありました。

奇怪な事に、今宿の松尾神社の森を通る花嫁は、必ず頭がなくなってしまうのでした。

この森の近くでは、
美しい娘がさらわれたり、
不思議な事が、
何度も起りました。
それ以来、
婚儀の送り迎えはもちろん、
里人もまわり道を
することになりました。
だれ言うとなくこの道を
花女郎道（はなじょろうみち）
松尾神社の森を
頭なし
と呼ぶようになりました。

46 南湖下町やせ地蔵

今の三橋松五郎さん（南湖五―一―六三）の屋敷に、石のお地蔵さまが立っておりました。

このお地蔵さまは、南湖の村に何か悪い出来ごとが起るとき、自分の体を細くして、村人に予告をしました。

それでやせ地蔵という名前がつけられました。

ある年、村の人がお地蔵さまを見て、随分おやせになったのに気ずき、何か悪い出来ごとがあるのではないか。

「みなの衆、気をつけてくらっせえ」

と南湖弁で、大きな声でふれまわりました。

そして、お地蔵さまの予告どおり南湖の大火が起ったのです。

人々は、右往、左往逃げまどいましたが、火は南湖下町を総なめにしてしまいました。

この時、お地蔵さまも一緒に焼けてしまいました。焼けたお地蔵さまは、それは、それはやせほそって、お気の毒な姿であったという事です。

村の人々は、自らのお身体を張って、村人を救ってくださろうとしたお地蔵さまに、涙をながして心からあやまりました。

その後、村人たちの手で、新しいお地蔵さまがつくられ、今でも大切に保存されております。

47 新町の弁財天

当時このあたりは、カヤ、アシがぼうぼうとして、ところどころに池の沼がありました。

真ん中にある一番大きく深いのを大池といいました。

この池は、外からは見えないくらい、草木におおわれていました。

ある日、清兵衛さんがこの池のまわりをきれいにしようとしましたが、どこからカマをいれようか、どこからクワをいれようか、手のつけようがありませんでした。

そこで清兵衛さんは人夫をたのんで、火を放ったのです。火は次第に燃え広がり下草がメラメラ燃えはじめました。するとどうでしょう。空はにわかに曇り、風はゴウゴウとうなり、鳥やヘビやキツネがあやしい声を出して、逃げまどいはじめました。

火の勢はますます激しく、天をも焦がさんばかりでした。

すると、その時猛獣か？大蛇か？恐ろしい怪物が火を呼び、風にのって、ひと筋の炎とともに天にのぼり、恐ろしいうなり声を上げました。見ると大きな瞳からは滝のような涙がこぼれ落ちていました。安住の地を追われた池の主は、干の川の方へ、消えていきました。やがて空は晴れ渡り、風もやみました。

村人は青くなって

「大池の主にちがいない」

と言うのでありました。

48 キツネの本部丑の御前

茅ヶ崎にキツネやタヌキが沢山いた事を皆さん知っていますか。

丑の御前ーここはキツネの本部があったところで、小さなホコラがありました。

昼の間は、木の陰に隠れて昼寝をしているのですが、夜になると活動をはじめ、悪いいたずらをするのでありました。

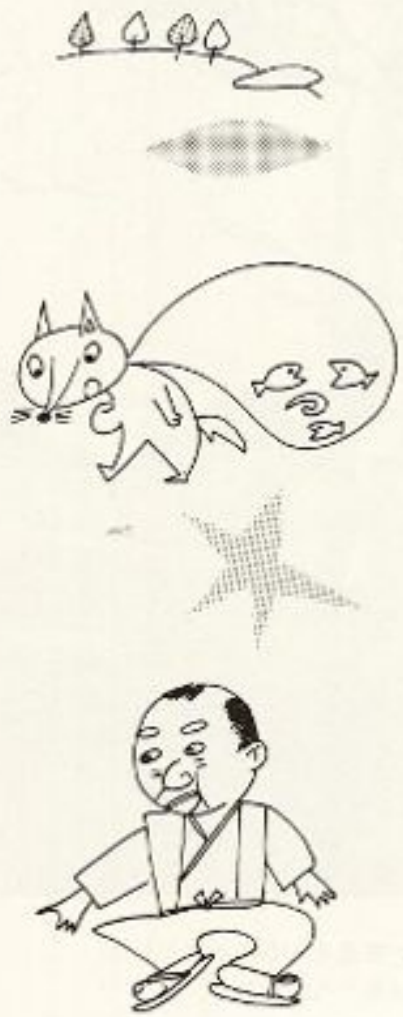
丑の御前は昼でもあまり人どうりがない、寂しいところでしたから、キツネは我がもの顔でした。

丑の御前　狐がいて、夜通る人を時々ばかして、道を迷わせ一晩中耕地をうろつかせる。

あたりが宵闇につつまれるころ、目をキラキラ輝やかせたキツネが、木陰から飛びだしてきます。

村人は、丑の御前にポーッと光るものを見ると、キツネが集まっていると言って、近よりません。そしてしばらくすると、その光はあちこちに散っていくのでありました。

萩園へ、小和田へ、赤羽根と、あちこちに出張しては、村人をからかい、食べものを捕ったりしました。今でも香川や円蔵あたりのお年寄りの中には、キツネにばかされた体験をおもちの方が、大勢いられます。



49 鶴が台団地

このあたりの縄文式文化時代は、大山街道の近くまで、大波小波が打ちよせて景色のよい所でありました。

やがて弥生時代になると田を作ることを知った村人が、円蔵生墾田（今鶴が台）という田んぼをつくりました。

相模川によってできた懐島の地北側は、まだドロ沼で円蔵大士腐（今鶴が台）は足をふみ入れると胸のあたりまでもぐってしまう大変な沼地でありました。

海が南へ移動すると懐島が栄え、頼朝が田んぼに鶴を離したところに鶴が町という地名がついたりしました。

鶴が台団地が建っているところは、昭和四十年頃までは、一面レンゲの咲きみだれる田園の、詩情ゆたかなところでありました。

50 東急ニュータウン

江戸時代高田の久保田家の先祖に、相撲取りがいまして、心豊かな楽しい人柄でありましたから、茅ヶ崎の人たちの人気ものでありました。

酒が何より好きで、いつも酒の徳利を持って高田村を歩いていた事から、彼の死後めずらしい角だるのお墓が本在寺に建てられました。

ここは小高い丘でしたから、茅ヶ崎方面が南の下の方に全貌できるのでした。眼下に見おろす高田耕地はこの近くでは、まれにみる美田でどこまでも続く一面の田んぼは弥生文化の時代つくりあげたものでしたが昭和四十五年ごろ田んぼが埋めたてられ東急ニュータウンが誕生したのです。

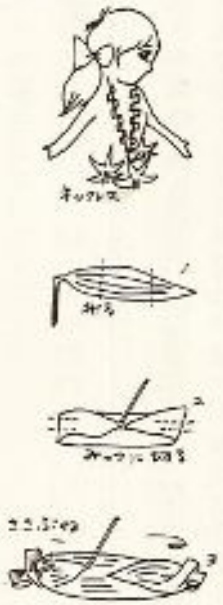
51 浜見平団地

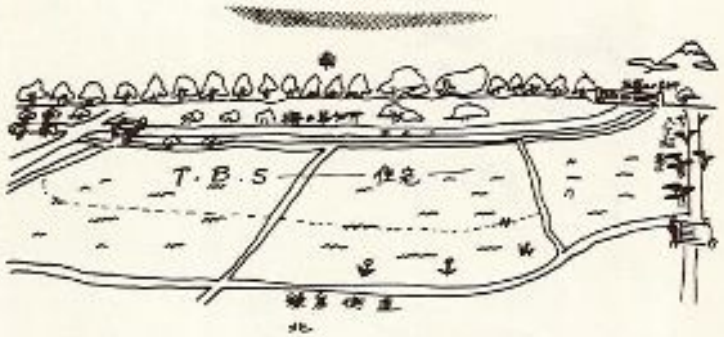
浜見平という地名の前は、柳島部落、松尾部落といわれていました。柳島は、懐島、中島などとともに相模川がつくりあげた島でありましたから、今の浜見平団地のあたりは波が打ち寄せていました。ですから、柳島の字名には、下河原、上河原、カニ原、浜川、コザフまた松尾は、中原、石原、川田などと水に関する字名がついておりました。矢畑の蔵屋敷（兵藤芳枝さんのあたり）から、柳島へ向かって米を積んだ船が悠々と川に浮かんでいる様は、江戸時代の名物でありました。

このあたりは、子供達の絶好の遊び場でした。陽の光りが、日ましに強くなる春は、あぜ道にみどりがけむり、夏になると、カエルがなき、夏休みの子供達が、エビガニ取りやトンボを追う姿でにぎわうのでした。

そして赤トンボが舞い、ススキがそよぎ、カカシが立ち、稲刈、取り入れ、田んぼのイナゴ取りと秋がやってくる。子供達の心はおどり、自然の使者が子供たちを招いたのでありました。この土地は交流豊なところで、レンゲ、ガマの穂、彼岸花が咲きこぼれるのでありました。

ガマの穂は、ほして乾草させて夏の夜、それに火をつけて鼓いぶしにしました。彼岸花ではネックレスをつくりました。今からおよそ千年ほど前、村人によって田がつくられ、田の中央の川では、ほおかぶりをして船をこぐ姿がついこの間までみられたものです。昭和38年一面の田んぼが埋めたてられ、浜見平の建設がはじまりました。工事が終ったのは、昭和40年でした。国道一号線から団地へ通じるガード下のところは、もとは川でしたので、チョッとの雨でも大水になり、雨が降ると車をとめてしまう事もあります。





52 TBS住宅

TBSのほぼ中央、千の川から分かれる小さな川は、子供達の絶好の遊び場でありました。

フナ、ドジョウ、オタマジャクシ、カエル、エビガニ子供達は自然を友として、日が暮れるのも忘れて、遊びたわむれるのでありました。

家はまったくなく、広くひろがった田園には、つみ草をする親子などもありました。

十夜のお祭りには、矢畑円蔵方面の人々は、この川にそってあるあぜ道を通って茶屋町に出かけたものでした。

オオバコの花の茎でやる草ずもうは、魅力のひとつで、どちらかが切れるまで勝負しました。なかには体ごと引

つばられても、まだ切れない強いのもありました。
相模川の流れによってつくりあげられたこのあたりは、水が豊富でおよそ千年ほど前から村人によって田がひらかれました。
ＴＢＳ住宅ができるまでは、一面田園風景が続いており、西に八丁松並木、空に富士山がくっきりと浮かび、まさに絵を見る美しさでありました。
今の住宅は、そんな所が埋めたてられ、つくられたのであります。

鎌倉街道（今の矢畑ー萩園線）。
中学郷土研究会。
右端トレパン姿が筆者。
左端は山口衛先生（現在、北陽中学勤務）
—1953年９月撮影

まちのかくれた文化財

遊歩道路の開通によって広い浜辺は、少女達の夢をはこぶ。

昭和11年 茅ヶ崎の砂浜に 湘南遊歩道路が開通した。